
SIXTH

彪峰イツカ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SIXTH

【Nコード】

N8132Z

【作者名】

彪峰イツカ

【あらすじ】

“THOU SHALT NOT KILL” 汝殺すべからず。

人工殺人抑制遺伝子による「平和」な世界。しかしその遺伝子マイノリティは迫害されていた。

世界を変えた少女と青年の、罪と罰の物語。 長編近未来SF小説。

オリジナル創作サイト「Never-never Land」より転載

第一章

1

人類は滅びの危機に瀕した。

その引き金が何であったのか、今となっては知る者も少ない。しかし結果だけは歴然とそこにあった。開戦前には七十億に達するとも言われていた人口は激減し、戦争終結から一世紀以上 復興の進んできた現在でさえ十億には満たない。かつてほどの人口を養える食糧生産は不可能である。戦争において一極を担ったアメリカ大陸は不毛の地となり、食糧危機の大ダメージを直接受けたアフリカも捨てられた大陸となった。再開発の話はあるものの、今は誰にもその余力がない。かつては経済発展を誇った日本でさえ、始めに新世界における中心となったヨーロッパから離れすぎているという理由で随分寂れてしまった。とはいえ、こちらはまだ盛り返している方か。

人類が住んでいるのはヨーロッパや中央アジアを始めとするユーラシア大陸北部を中心とした一部の地域であり、今や国そのものの枠組みは破壊されきってしまった。国家も宗教さえも、この絶望の前には無力だった。

そこに台頭してきたのが「企業」である。かつて声高に叫ばれたグローバル化の名残を残すように巨大化し、既に営利組織の枠には収まりきらなくなった企業群は、大きく四つの系列に分かれた。それぞれの系列企業を統率するのは四大企業と呼ばれる巨大コングマリットで、かつての国家 というよりも多国間における共同体の役割を果たしている。ARMADA、BUIS、CROM、DOM それぞれの勢力地域は順に東アジア、ロシア、中央アジア、そしてヨーロッパである。

初期の頃はDOMの力が圧倒的に強かったが、今はARMAD

Aが急速に台頭してきている。その原因となっているのが、あるひとりの男であった。名は邑慆むらたけ社。弱冠じやくわん二十七歳でARMADAの重役の仲間入りを果たした彼が、この壊れかけた世界に再び波紋をもたらすこととなる。

また、これは本人すらあずかり知らぬ事ではあるが　ある意味では邑慆本人以上に世界に影響力を持つようになる少女がいる。レイレ白瀧。身寄りのひとりも居ない孤独な彼女は、何の変哲もない少女だった。ただ、彼女が「BGS」であったことを除いては。

2

かつて上海と呼ばれたその街は、ARMADA本社の存在によって非常に発展していた。いや、街そのものが本社の敷地内にあるといつてもいい。

その中にある、ひとつの学校　それは特別なものだった。幼稚舎から大学院までARMADAが直接経営しているのだが、そのカリキュラムも教師も普通ではない。何よりも通っている子供たちが普通ではなかった。

「BGS」なのである。

四月の新生を迎えた高等部では、兼任で理事長を勤める邑慆が挨拶に立っていた。彼の肩書きが一体幾つあるのか、側近でもない限り把握しているものも少ないだろう。

一通り当たり障りのない話題を通った後、不意に邑慆は言った。

「僕は……君たち『BGS』こそが人間らしい人間だと思う。一般人は君たちを人間じゃないというけれど、それは間違いだ。人類という種族四百万年の歴史の間、遺伝子『SIXTH』なんてずっと存在しなかったのだから、君たちこそが人間なんだと　僕はそう思っている」

彼の台詞は三十名の新生を含め百人弱の全校生徒に万雷の拍手で

もって迎えられた。

「SIXTH」 それは人類が自らに嵌め込んだ楔であると言われる。

あの戦争からようやくとの思いで生き延びた人間たちは、二度と殺し合いが起きないよう画策した。その中で生まれた最大のプロジェクトが「SIXTH」であり、それがそのままそのプロジェクトで生み出された遺伝子の名前となった。前世紀最高の科学者、シモン・ウエルナードがその生みの親である。

人間と他の動物とは同種族の「殺害」の持つ意味が違う。動物たちも殺し合いはする。特に自己の遺伝子を残すために、雄が他の雄の子供を殺すなど、人間から見ると残虐に思われる殺戮も行う。だがそれには「自己の遺伝子を残すため」という大義名分があり、自然界はそれを認めている。そうやって生き物は進化してきたのである。

しかし人間は違う。宗教の違い、人種の違い、民族の違い、意見の違い、利害の対立、そういった問題が即戦争に 殺し合いに結びついてしまう。誰の生存も脅かされてはいない場合でさえ殺し合いが起きる。一方で自然界なら淘汰されてしまうかもしれない弱者を福祉によって守り、その一方で必要のない殺人を繰り返す。

人間は矛盾した存在だ。本能を凌駕する理性の為せる業といえはそれまでだが、その結果がこのさまではそうも言っていない。

ならば、人類自らが自身に欠落した本能をプログラムしてやればよいのではないか。このような経緯を経て「SIXTH」が全人類の螺旋構造の中に配置され、直接的な殺人は起きなくなった。無論、事故などによる過失致死はなくなるのだが。

一体「SIXTH」はどういった機構で殺人を予防するのか。そのことに多くの人々の関心が集まったが、ウエルナードは何も言わなかった。それが明らかになれば、人間から「SIXTH」が取り

除かれる日が来るかもしれないと危惧したのだろうか。

しかし、すぐにそのことから人々の関心は薄れた。生き延びるためにそれどころではなかった、という理由もあるし、何よりようやく訪れた平和を誰も手放したくなかったのだ。仕組みがどうであれ、平和になったのだからそれで良いではないか。

だが、どのようなプログラムにもバグは存在する。この場合のプログラムの齟齬は、「BGS」「BROKEN GENES IXTH」と呼ばれた。すなわち、先天的に「SIXTH」を持たない者たち。

圧倒的少数である彼らが新世紀において認知されるには時間がかったが、認知されてしまえば忌み嫌われ、社会から爪弾きにあうのは、ある意味当然のことかもしれない。親からも忌諱され、子供のうちに捨てられることも多かった。現在、彼らのほとんどは四大企業群によつてそれぞれ保護されているが、社会に馴染んで生きていくことは出来ないのが現状である。

ARMADA以外の三大企業の統治域内では、人と接することの少ない職場が与えられたり、「BGS」だけが集まって暮らすコミュニティが作られたりしているが、それでも「BGS」に対する迫害は続いた。一般人には殺人はできなくとも、相手に傷害を与えることは可能なのである。「BGS」が一般人を殺したという話は聞いたことがないが、一般人に「BGS」が襲われたという話ならよくある。皮肉なことだ、と考える知識人も多いが、どうすることもできないのが実情だ。

ARMADAでは違う。「BGS」はここでもやはり子供のうちから社会とは隔離されているが、他所とは違って徹底的なエリート教育が施されていた。教育の対価としては、ARMADAの「BGS」研究に全面的に協力することが求められる。というのも、一般人よりも「BGS」の方が様々な才能を豊かに持っていることが多いからだ。これは既に科学的に実証された事実である。IQの平均値も高い。人間がこの戦後一世紀の間に失ってしまった様々な

可能性を、彼らは持っているのだと主張する科学者もいた。

そのことに目をつけたのが邑悛Ⅱ社であり、彼が年齢不相応にARMADAの重役となっているのもその功績による。実際、教育された「BGS」たちは様々なところで能力を開花させており、それはARMADAの発展に大きく貢献していた。

このことに気付いた他の企業も慌てて「BGS」たちの能力の研究に乗り出したが、今ではARMADAとの差は火を見るよりも明らかで、その技術の差は埋めがたいまでに広がっていた。

レイⅡ白瀧は今年高等部に入学する生徒のうちの一人である。アジア系である彼女は黒い髪に黒い瞳　利発そうな顔立ちをしている。入学式を終え、彼女は友人である椿Ⅱ水沢と共に校舎の廊下を歩んでいた。

「理事長って意外に若いのね」

「確か、二十七才じゃなかったかしら？」

興奮冷めやらぬ様子の椿に、レイは苦笑しながら相槌を打つ。椿が熱狂するのも無理はない。邑悛Ⅱ社は「BGS」たちの間では力リスマ的な存在なのだ。

「レイは前から知ってたんだよね？　理事長のこと」

「ええ……、出世するよりもっと前だけだね。孤児院にいた私を迎えに来てくれたの。でも、理事長はもう忘れていると思う」

レイは物静かに答える。

壇上の邑悛は長身で、柔らかそうな前髪を左右に分けていた。黒曜石のような瞳は力強く、精彩を放つ。そして、優しい笑み。

レイが初めて会った時と同じだった。雨の中、あの眼を覗き込んだときと同じ。不思議な既視感に襲われた。

「レイ、総代でしょう？　邑悛さんのこと間近で見られていいなあ」
午後から引き続いて行われる式典で、レイは新入生の総代として邑悛から入学許可証を受け取ることになっている。

「緊張する？」

「……少しね」

「そつは見えないけど？」

レイは苦笑した。自分は感情を表すことがとても苦手だ。孤児院にいた頃、「BGS」だからという理由で冷たい扱いを受けたことが原因かもしれないが、自分ではよく分からない。実際、あまり彼女の感情には波風が立たない。自分の周りで起きていることなのに、どこか遠くの世界での出来事のように感じてしまうのだ。

ただひとつの例外は　きつと、あの邑慆と出会った日のこと。

あの時のことだけは、ひどく鮮明に覚えている。

「総代つてことは、レイ入学試験でトップだったってことでしょ？　さすがね」

椿はそう言つて微笑んだ。

無口で無表情な優等生と思われることが多いレイ。それはあながち間違つてはいないのだが、多くの同級生がそんな画一的なイメージのみで彼女を判断し、敬遠する中で、椿は素直にレイを尊敬してくれている。

「ありがとう」

レイはかすかに微笑み返した。それが、彼女にとっての精一杯の感情表現だった。

3

午後からの式典で、邑慆は壇上から一人の生徒をじつと見つめていた。総代として歩み出てくる少女　レイ＝白瀧。高等部進学時に行われた種々のテストの結果が記されたリストを見たが、その中でずば抜けた数値を示していた生徒。それが彼女だった。

「レイ＝白瀧……」

邑慆はつぶやく。彼は忘れてなどいなかった。忘れるはずがない

のだ。邑慥がこちらをちらりと見た少女に微笑みかけると、彼女はどきりとしたように視線を外した。彼と同じ、深い闇色の瞳。

「彼女の入学に間に合いそうだな、一貴」

小さく呟いた彼は会心の笑みをひらめかせる。久しぶりに鼓動の高鳴りを覚えた。

「面白くなりそうだよ……とても、ね」

レイは壇上に向かって階段を一步一步上っていく。何故か、体が汗ばんでいた。緊張とは違う、もっと……もっと胸が締め付けられる感覚。胸が痛い。先ほど彼と眼が合ったときから、ずっと鼓動が早く、強くなっている。

どうしたっていうの……。

らしくない、と自分を叱咤し、邑慥の正面に立った。再び眼を合わせる。邑慥は穏やかな表情でレイを見つめ、そして唇の動きだけで囁いた。

もう、あれから六年だね。

レイはびっくりして邑慥を見つめた。彼は覚えていたのだ。レイを孤児院に迎えに来た　六年前のことを。

「入学おめでとう」

今度は邑慥は口に出して言い、入学許可証を彼女に差し出した。

両手をすつと前に出し、レイは受け取る。さりげなく移動した邑慥の指先が、レイの手を撫でるように掠めていった。

「……？」

不審そうな視線を邑慥に向けそうになり、レイは慌てて眼を伏せる。

期待しているよ。

その言葉は再び声には出されていなかったが……しかし、彼女には真っ直ぐ届いた。

きっとそのとき、彼女の運命は廻り出したのだろう。

第二章

1

轟音を立ててヘリが舞い降りる。

ヨーロッパ大陸随一の研究都市、旧ベルリン。シモン・ウェルナーの生誕地でもあるここは、現在学園都市として栄えている。その一角のARMADA付設研究所の出張機関。超高層ビルの屋上にはヘリポートがあり、そこには一人の男がたたずんでいた。金茶色の長い髪と眼で、白衣を着ている。

一貴＝斗波、二十九歳。邑悛の大学での同級生だが、学年は彼のほうが三つ上だ。というのも邑悛はスキップで入学していたからである。

大学での成績は一貴が主席で邑悛は次席だった。それは邑悛が必要がないとみなした単位に見向きもしなかったからで、実際の成績は邑悛の方が良かったはずだと一貴は思っている。

大きなジェットヘリがヘリポートに鎮座し、扉が開いた。降りてきたのは、一人の少年。体にまとうのはARMADAの「BGS」の着ている制服だが、年齢はまだハイティーンだろう。身のこなしも軽快に一貴の元へと駆け寄り、敬礼した。

「チームU - 20所属、認識番号オーエイトの硫平＝鈴摩です」

「……ユーにじゅうって何や？」

一貴は眼を瞬かせた。

実は彼はずっと研究畑にいたので、組織の仕組みは良く知らないのである。硫平は気を悪くした様子もなく、風に乱された黒髪を押さえつけ、説明した。

「アンダートゥエンティ。二十歳以下の『BGS』で構成されている部隊のことです。学校の高等部に入ると自動的に組み込まれる仕組みになっています。だから十五歳から二十歳までの『BGS』

は全て入っていて……、大体百五十人くらいかな」

「ほな、オーエイトいうのはゼ口、八チのことか？」

「そうです」

「へえ」

一貴は感心して呟いた。

「そういう仕組みも邑悖が作ったんか。あいつもようやるなあ」

「……………」

硫平はさすがにコメントに窮した。邑悖を呼び捨てにする人間にもなかなかお目にかかれないし、さらに彼が「ようやる」のは当たり前である。しかも「あいつ」ときた。無礼かと思いつながら黙り込むと、しかし一貴は硫平の返答は求めていなかったようで、

「とりあえずお迎えご苦労さん。ほな行こか」

と軽い調子で言った。

「はい。それではこちらへどうぞ」

硫平は先導して歩き始める。パイロットたちはそんな彼らを横目で見ていたが、一貴に向けては軽く会釈するものの、硫平のことはほとんど無視していた。硫平はパイロットの白眼視には慣れているのかとりあわず、一貴と並んで後部座席に座ると通信機器を手にした。

「こちらU - 20、オーエイト。斗波氏と合流しました」

『ご苦労様、硫平君』

一貴の耳に懐かしい低音が漏れ聞こえてくる。邑悖は硫平に指示した。

『そのまま本部に帰っておいで。任務は終了だ』

「はい」

『一貴はそこにいるのかな？』

「ええ。隣りに座っておられます」

『じゃあ少し替わってもらおうか』

「はい」

硫平は頷いてマイクとヘッドセットを一貴に渡した。一貴は黙っ

て受け取り装着する。

『一貴かい？ 久しぶりだな』

「まあな。一年ぶりくらいか？ 元気しとった？」

『ああ、元気だよ。太らないように気をつけている』

「それはそうと、お前どういづつもりや？ いきなり俺を呼び戻すいうんは」

『僕が決めたわけじゃない。上層部の決定だよ』

「同じことやろ」

一貴の表情は真剣なものになっていた。

「俺は企業のことなんか何も知らんし、医者としてもそう腕がええわけでもない。純粋な遺伝子工学なんか、何でお前が要るんや。一体何に使うつもりやねん」

『……やれやれ』

邑慆は苦笑したようだ。

『そついうのは機密事項だよ……こんなセキュリティの甘い通信で話すことじゃない』

「……そ、そうか。それはすまん」

一貴は急にトーンダウンする。一つのことを気に掛かると頭の中がそれでいっぱいになってしまって、細かいところに気が回らない。昔からの自分の欠点だ。

「ほな、帰ってから聞かせてもらっわ」

『うん。あ、そうそう何か気付いたことはないかい？ 一貴。そこにいる硫平のことで』

「……ええ子やな。礼儀正しいし」

一貴はちらりと側の硫平を見遣る。彼は黙って窓の外を眺めていた。

「けど……パイロットの態度がちよつと悪いわ」

『……そうか』

邑慆の声が不意に冷たく響き、一貴はぎよつとした。こういう声を出すときの邑慆は必ず後で何かやる。それを彼は経験則で知って

いたのだ。

『ありがとう。参考になった。それじゃあね』

一方的に通信を打ち切られ、一貴は戸惑う。

「終わりましたか？」

硫平の問いに頷き、機器を返すが違和感は拭えない。結局聞きたかったことは何一つ聞けなかったし、邑慆を目の前にして問い詰めるところでうまくはぐらかされてしまうような気がする。だが、きつと彼には何らかの思惑があるはず。そしてその目的のために自分を使おうとしている。一貴にはそれがわかっていても、どうすることもできないのだった。

2

高等部に入学すると実戦訓練のカリキュラムが大幅に増加して、レイら新入生を驚かせた。

「BGS」部隊は軍隊ではない。それは確かだが、邑慆がチーフとして率いているこの部隊は治安維持の為に出勤することも多く、他の企業からは民間軍隊も同じだと批判を受けていた。

市民は市民で、自分たちが人間ではないと蔑んでいる者たちに社会の治安を守られるのは自尊心が傷つくのか、「BGS」への反感をいっそう強めている。それは決してARMADA外部のみで起こっていることではないのだが、レイたち「BGS」はそれを知らない。邑慆の、しばしば強引過ぎる「BGS」に関する施策は、ARMADA内部にも亀裂を生んでいるのだった……。

その日、学科授業を終えたレイに突然呼び出しがかかった。理事長室へ　と告げる担任の言葉に、思わず側の椿と顔を見合わせる。「あの、一体どういう用件なんですか？」

黙っているレイ本人に代わって椿が問い、担任は苦笑した。

「僕は知らないけれど、多分レイ君はそろそろ正式にチームに組まれるんじゃないのかな」

「……………」

レイの無表情な顔の上に軽い緊張が走る。椿は大きく息を呑んだ。正式にチームに組まれる それはすなわち、実戦任務に着くということ。

「今年の生徒は優秀な人が多いって、理事長もおっしゃっていたからね。椿君も、そろそろかもしれないよ」

「まさか」

椿はそう言って笑うが、彼女はレイに次いで成績のいい層に属している。担任が冗談を言ったとも思えなかった。

「じゃあ、行ってきます」

レイはぼつりとそう言うのと軽く手を振り、担任に会釈して廊下を歩み去った。担任がぼそりと呟く。

「レイ君も、もう少し打ち解けてくれればいいんだけどね……………」

全てを映し込んでいるようでいて、それら全ての侵入を拒絶しているかのような黒い瞳。白い顔の上の表情はあまり動かず、いつもどこか冷たい眼差しで見透かしている。

「優しい人なんですけど」

椿は弁解するように肩をすくめた。

「ただ、きつと…………表現が下手なんだと思います」

「そうかな」

「ええ」

椿は微笑んだ。

「私、レイのこと好きですから」

担任も明るく笑う。

「そうか、それはよかった」

レイの孤独の影の中には、まだ何か秘密があるような気がする。知り合って間もない担任でさえ、薄々それを感じ始めていた。

邑慄は先日硫平と共に行動した二人のパイロットを解雇する手続きをした後、理事長室で一貴と共にレイを待っていた。

「それにしてもなあ」

一貴はソファに腰掛け、紅茶の中に砂糖をがばがばと放り込みながら呟いた。

「あんな小さい子らを訓練して使う、てどういっこっちゃ」

「硫平は君より背が高いけど？」

「そういうことやないやろ」

「はは、分かってる」

邑慄はストレートのままの紅茶のカップを軽く揺らした。実はこの男、猫舌なのである。

「けれど、彼らをずっと社会に触れさせないわけにもいかないだろう？ それに彼らは自分で自分の身を守る術を身につけておかないと」

「え？」

「僕は一般人にリンチにあって半身不随になった『BGS』を何人か知っている」

邑慄の冷たい声が一貴の胸を刺す。俯き加減になった彼に、邑慄は微笑みかけた。

「君を責めているわけではない。ただ事実を言ったのみだよ」

「……ああ」

一貴は頷く。

「何とかならへんのやろか。このままやったら『BGS』はずっと社会から阻害されたまんまや。ARMADAにおつてもそれは同じやろ。俺を含めた一般人そのものの意識を変えんと」

「それは……」

邑慆がいいかけたとき、ノックの音が響いた。

「はい？」

「レイ＝白瀧です」

澄んだ少女の声に、邑慆は口元に笑みを浮かべる。

「どうぞ」

扉が開き、レイが姿を見せた。均整の取れた長身にフィットした制服は、彼女の髪や眼と同じ夜色だ。そしてそれは邑慆の瞳とも同じ色。

一貴は立ち上がり、軽く会釈した。邑慆が紹介する。

「レイ、彼がARMADA遺伝学研究所の新所長になる一貴＝斗波だ」

「はじめまして」

「……はじめまして」

レイは礼をした。一貴は少し落ち着かない様子で邑慆を見遣る。

「一貴、彼女は高等部一年のレイ＝白瀧だ」

「あ……ああ」

「レイ、よく来てくれたね。そのソファの開いているところにかけ給え」

邑慆はレイにそう言い、デスクの引き出しからカードのようなものを取り出した。

「予想はついていると思うけれど、今日呼んだのは君にU-20のチームに正式に入ってもらって、訓練を開始するためなんだ」

「……はい」

「まだ実戦任務につかせはしないが、後方支援などから徐々に始めて行く。これは君のIDカードだよ」

邑慆にカードを手渡されたレイは、そこに記されたナンバーを読んだ。

「ゼロゼロ……？」

「ダブルオーと読んでくれ。それが君のチーム内での認識ナンバー」

「はい、理事長」

レイは頷いた。邑慄は軽く首を横に振る。

「学校ではそれでいいが、チームとして行動する場合、僕のことには邑慄、でいい。チーフ、でもいいけれど、それはちょっと研究スタツフみたいだしね」

「じゃあ……邑慄、さん」

「うん、それでいいよ」

一貴は何故自分がここに呼ばれているのかが分からず、不審そうな目を邑慄に向けている。彼はわかっている、というように頷いて、「君をチームに入れる前に、いろんな能力の検査をしておきたいんだ。その責任者が一貴、君だよ」

「俺？」

「他に誰がいるんだ。君の仕事だろう？」

邑慄は笑って二人を促した。

「さあ、早く始めないと今日中に終わらないよ」

「は……はい」

「ほな行こか、レイちゃん」

「『レイちゃん』？」

声を上げたのは邑慄だった。

「何や」

一貴が振り向くと、邑慄は悪戯っ子のような表情で彼を見ていた。困ったことに、邑慄にはこの表情が実に良く似合う。

「その呼び方は親密すぎるな。妬いちゃうよ？」

「アホかお前は」

一貴は呆れたように呟く。

「『レイ』て呼び捨ての方がなんぼかやらしいわ」

「僕はいいんだよ。誰にでもそうだから」

「俺かてせやつちゅうねん」

「はいはい、分かった分かった」

邑慄は肩をすくめてそう言い、軽くレイに目配せしてみせた。レイは戸惑ったように視線を揺らし、小首をかしげる。状況が良く飲

み込めていないらしい。

「それじゃ、これからよろしくね、レイ」

邑慄はデスクから立ち上がりレイの側へと歩み寄ると、その白い手をとって軽く握った。邑慄の手は暖かく乾いていて、レイの冷たい指先によく馴染む。

「……………」

ふと邑慄は真顔でレイの瞳を見つめた。レイも瞬きをやめ、見つめ返す。一瞬の交錯。

「何見つめおうとんねん」

一貴の声で我に返ったレイは、慌てて抗議の声を上げた。

「べ、別に見つめてるわけじゃ」

「あれ？ 違ったの？」

邑慄までもがそう言って笑う。

「君みたいな若い子にモテると嬉しいんだけどね」

「む、邑慄さんまで」

レイの頬が紅潮する。と、邑慄のデスクの卓上電話が鳴った。

「ごめん、タイムリミットみたいだよ。本社の方のオフィスに戻らなきゃ」

邑慄はそう言って握ったままだったレイの手を離すと、皮張りの椅子にの背に掛けてあった上着を手を取った。

「途中まで一緒に行こう」

「……………はい」

「……………」

一貴は途中から疑念の眼差しで邑慄を見ていた。他人には分からないかもしれないが、付き合いの長い一貴には邑慄のことがほんの少しに過ぎないけれど分かる。今、邑慄はとても上機嫌だ。それも異常なまでに。いったい何が彼の機嫌を高揚させているのか。一貴は気になって仕方がなかった。

春樹「辰川は上海下町に住む何でも屋である。

上海はARMADAの本社がある町として有名だが、その範囲を少し出してしまうばそこは未開発地区だらけだ。戦後かろうじて残っていた旧世界の遺物をそのまま利用しただけの街並みだが、そこに住んでいる者は意外と気にしていない。春樹もそういった者の一人だった。

今回彼が相手にしている顧客はこの辺りによくある非合法反企業組織だ。非合法反企業組織は通称ゲリラと呼ばれているが、その大小は様々で活動実態も様々である。共通するのは企業支配の実態を変え、かつてのような政府による世界統治を目指そうとしていることくらいだ。時折デモ行進をやってはARMADAの治安部隊俗に言う「BGS」部隊だ。に取り締まられたりしているが、市民にとってはそれがどうした、というレベルである。

「誰が支配者だって変わらねえのにな」

春樹が今回売りつけるのは合法レベルのスタンガンだ。それを非合法レベルに改造するのは相手の勝手で春樹は知らない。どうせスタンガンで人は殺せない。銃規制はかつてよりずっと厳しいし、そもそも一般人に人は殺せないのだから銃など要らない。

「やれやれと」

指定された空き地にトラックを止める。このトラックごと売りつけることになっていた。

「時間通りだな」

春樹が運転席から降りた瞬間、その後頭部に固いものが突きつけられた。

「……何のつもりだ？」

「振り向くな。これは銃だ」

「……ちよい待ち。俺はあんたらと取引に来た」

「春樹」辰川だろう？ 振り向きさえしなきゃいいんだ。顔を知ら

れるわけにはいかないのな」

「だったら覆面でもして来いよ」

「……目立つ」

「街中で銃突きつけるのは目立たないとしても？」

「そんなことはどうでもいい」

明るい褐色の髪の中にごりつと押し当てられた銃身が痛い。春樹は眉をひそめ、その単語を呟いた。切り札となりうる、単語。

「『BGS』」

案の定、男の動きが止まった。

「……………」

「お前、『BGS』だろ？ 何のつもりだ？」

「別に、お前を殺すつもりはない」

「当たり前だ。何もしない俺を殺すって道理があるか」

「……お前に協力して欲しいことがある」

「あ？」

男の声の調子が変わっていた。

「ARMADAをどう思う？」

「どう思っただって……」

春樹は胸の奥で呟いた。関わりたくない相手ナンバーワン。

「我々はどの企業にも属さない『BGS』の集団だ」

「……あそ」

「一般社会との共生を模索している」

「……ふうん」

「そのためにはARMADAに飼われている状況の『BGS』たちを我々の味方にしたい」

「……と言われても」

「お前の人脈には情報屋やハッカーや武器屋がいるだろう。協力しろ」

「嫌だ」

春樹はきつぱりと言った。背後の男がたじろぐのが分かる。

「悪いが俺は社会福祉運動家じゃないんでね。あまり金になりそうもないし、大企業とけんかする気もない」

「我々を見捨てるのか？」

「拾った覚えもねーよ」

春樹は呟いた。

「それに、企業内の『BGS』はそれはそれで上手くいつてんだろ？ 無理して共生しなくたってだなあ」

と振り向き、春樹は息を呑んだ。背後の男の顔は、左半分がひどい火傷に覆われていた。

「……この火傷は」

赤黒い皮膚の上を男の指先が這う。片手はまだ春樹に銃を突きつけていた。

「一般人たちに家を焼かれたときのものだ。家族の一人に『BGS』がいる。それだけの理由で、俺の家族は焼き討ちにあった」

「……死んだのか？」

「いいや。お前たち一般人は殺人を犯せない。……だがあの日、家族と暮らしていた頃の俺は死んだ。俺は家族を失ったんだ……」

男は憎悪に顔を歪める。春樹は彼の顔を見ていられなくなって目を背けた。

「まあいい」

男は銃を下ろした。

「お前に俺たちに協力するつもりがないのなら、仕方ない」
「……悪いな」

「金はもう振り込んである。しかし少々水増ししておこう」

「へ？」

驚く春樹に向け、男は言った。

「我々の計画を実行に移すまで、しばらく共に行動してもらおう」
ガキン、と春樹の頭が鳴った。振り下ろされた銃身にしたたかこ

めかみを殴られ、気が遠くなる。

「マジ……かよ」

春樹は呻いた。家には妹がいるというのに。

「妹さんのことは知っている」

男の声が遠くから聞こえた。

「君の友人のリイという女に連絡を入れておいた。妹さんの面倒は彼女が見てくれるだろう」

「……………」

「心配要らない。すぐに返してやるさ……………」

「サイ……テーだ」

春樹は毒づきながら気を失った。いや、気を失ってからもしばらく毒づき続けていた。

第三章

1

リィ＝スピアフィールドが辰川家を訪れたのはその日の夕刻だった。以前から渡されていた合鍵で中に入る。

「お帰りなさい、はるちゃん！」

妹のキラが飛び出してきた。ハニーブロンドの髪の毛、とても可愛い少女だ。春樹とはあまり似ていない。年齢以上に幼く見えるのは春樹が過保護なせいだろうか。

「すまないが、春樹じゃない」

「あ……リィさん」

顔馴染みのリィの姿に、キラは微笑の質を微妙に変えた。きっと春樹の帰りを待ちわびていたに違いない。

「はるちゃんならまだお仕事だけど」

「知っているよ」

長い金髪をポニーテールにしたリィは、キラの目にはとても大人びて見える。春樹と組んで仕事をすることの多い彼女は、キラにとっては姉のような存在だ。そのリィがキラをじっと見つめている。その表情の固さに、キラは緊張した。

「キラ、落ち着いて聞いてくれ」

「何？」

「春樹が拉致られた」

「……えっ？」

キラは聞き返す。リィは厳しい表情のまま、

「さっき匿名で電話がかかってきたんだ。身の安全は保障すると言ってきているが……。全く、妙な取引相手にひっかったものだ」

「そ、そんな……」

青ざめたキラを見て、リィは少し慌てたようだ。キラを泣かせた

りなどしたら春樹に殺される。何とか元気付けようと、リイは彼女の肩を優しく叩いた。

「心配するな。何とかする」

「……うん」

キラの蜜色の瞳に涙が溜まる。ずつと二人で生きてきた兄妹だ。幼くして両親を亡くしてから、ずっと。

春樹がいつも守ってくれたから、キラは今こうして生きていられるのだと思う。春樹が居なければ、幼いキラなどこの街で生き延びられたかどうか疑わしい。

リイはキラの頭を撫でると春樹の部屋へと向かい、所狭しと置かれたコンピュータを次々に起動させた。

「まずは相手の特定だ……。電話は逆探知できなかったし」

独り言を呟きながらファイルを探す。春樹は取引相手の情報は必ず残しているはずだ。

「……これか」

プロテクトを数秒とかからずに解除する。

「……………」

キーボードを叩きながら情報を検索するリイの横にキラは紅茶を置いた。それが今の彼女に出来る精一杯だ。

「あの、リイさん……」

リイを信じるしかない。

「……大丈夫だよ、キラ」

リイは画面を見つめたままそう言った。

「相手は私を見くびっていたようだな」

その口元には薄く笑みが浮かんでいる。リイがコンピュータを起動させてからまだ数分だが、彼女にかかれば大抵のセキュリティなどあつという間に突破されてしまう。今や春樹を攫った組織のことなど、リイにとっては手に取るように明らかだった。

邑慥はその報告をオフィスで受け取った。前々から目をつけていた「BGS」の反体制派組織、「FFA」 Free From Allの略らしい　　が街の便利屋の青年一人を拉致したらしい、というものだ。

「これはれっきとした犯罪行為だな」

邑慥は呟き、やがて笑みを浮かべた。

「ようやく尻尾を出したか……」

「BGS」の企業への隷属を拒絶する「FFA」たちは、市民からもよく思われていない。どちらにせよ「BGS」は一般社会で生きていくことはできないのである。それを何とかしたい　「FFA」の考えは邑慥にも理解できるが、理解できるからといって支援してやるつもりは毛頭なかった。むしろ、その逆だ。

邑慥は静かに笑みを深める。

「……レイを使ってみるチャンス、か」

邑慥はオフィスから通信を開き、U-20のチームの中から幾人かの「BGS」たちを選び出して召集した。セルマ・ランティス。硫平・鈴摩。李　香龍。最も戦闘能力の高い彼らを筆頭に、数名。「FFA」はそれほど大きな組織ではない。というよりも、大勢の「BGS」たちが集うことそのものが不可能なことだ。多くて二十名程度だろう。

「彼らで十分相手できる」

邑慥は最後にレイを選んだ。

「彼女には、春樹・辰川の自宅に行ってもらうことにしようか」

さすがに「FFA」と接触させることはできない。　　レイにもしものことがありでもしたら、僕は非常に困る……。

「さて」

彼らを召集した小会議室へと邑慥は立ち上がった。

「さっそく面白くなりそうだな」

上着に手を通し、邑慆は誰へともなく微笑する。その笑みの意味を理解できる者は今はまだ、どこにも存在しなかった。

その十数分後　任務を与える「BGS」の中では最後に邑慆はレイを呼び、彼女に課せられた役割の内容を告げた。

「君は誘拐された春樹」辰川の家に向かってくれ」

「はい」

大人しく頷くレイに満足げに微笑み、

「そこには彼の妹と、多分友人がいる」

「友人……ですか」

「そう」

どうやって調べたのだろうとレイは思ったが、そんなことはARMADAにとつては多分簡単なことなのだろう。超巨大コングロマリットARMADA　その頂点に近い場所に居る邑慆。本来は雲の上の存在のはずなのだが、レイは何故か彼に親しみを感じる。

いや、レイだけではない。多くの「BGS」たちが感じていることだ。

邑慆は彼の武器の一つでもある人懐こい笑みを浮かべ、レイに説明した。

「その友人は、下町では有名な情報屋なんだ。『FFA』は彼女に接触したらしいから、おそらく既に組織の概要を割り出されているだろう。彼女と情報の交換が出来れば、それに越したことはない」

「私が行って大丈夫でしょうか……」

「BGS」である自分が暖かく迎え入れてもらえるわけがない。レイの眼差しは如実にその不安を物語っている。邑慆は彼女を安心させるように、その肩を軽く叩いた。

「君はARMADAの構成員だよ。それに『BGS』チームは社会に多くの貢献をしていて、沢山の特権が認められている。そのことは君も知っているね？」

「……………」

「もし彼女が協力を拒むようであれば……最大限ARMADAの権威を振りかざすんだ。君はあまり気が進まないかもしれないが」

「……はい」

浮かない顔のレイに、邑慥は優しく言い聞かせる。

「駄目だったら駄目でいい。それは君の責任ではないから、気にすることはないよ」

「……はい」

レイは頷く。

「……………」

邑慥はレイが続けて何かを言おうとしているような気配を感じて少し待った。しばらくの沈黙の後、レイが口を開く。

「どうして……『FFA』の人たちは誘拐なんて……」

「手段を選んでいられなくなったからだろうね。企業には属したくない。けれど、一般人と同じようにして生計を立てていくことはできないわけだから」

「……ええ」

レイの表情は憂いを含んで晴れない。

「彼らも同じ『BGS』だから、心苦しいのは分かるよ」

邑慥は優しくレイに語り掛ける。

「けれど　同じ定めを持つ者だからこそ、彼らが道を踏み外したときには正さなきゃいけないんじゃないかな」

「……………」

「迷うなどは言わない。悩むなどとも言わないよ。君の自由だ。君はロボットでも奴隷でもないんだからね」

レイが邑慥の目をじっと見つめる。その瞳の色に微笑みかけて、邑慥は言った。

「君は『人間』なのだから」

さらにその十数分後　ひとけのない女子更衣室にレイは一人で居た。ベルトを締め、銃を装備してブーツを履く。ブーツの底にはエッジが仕込まれていて、人間の足の腱などそのつもりであれば簡単に切断できる。その他、戦闘タイプの制服には各種装備が備えられていた。レイは初めて身につけるそれらに緊張するが、与えられた任務を考える限りそれは使う必要がなさそうだった。

まだレイは迷っていた。同じ「BGS」たちと敵対するのは嫌だ。けれど……。

「私は、応えたい」

ぼつりと呟く。まだU-20の実戦チームに入って間もないレイに今回の任務を任せてくれた　邑悛の信頼に応えたい。

間違っているのかもしれない。これからチームに入って任務に就いていけば、さらに迷うことも増えるかもしれない。

「でも、私も信じたい」

レイは眼を閉じた。私に任務を与える　私に居場所を与えてくれる、邑悛さんを信じたい。

「……………」

指先が銃を探り当て、安堵したようにやがて離れていく。間もなく任務の開始時刻。レイは更衣室を出た。

3

春樹が眼を覚ますと、ひんやりとした感覚が頬を通して伝わってきて、全身がぶるりと震えた。

「ん……………」

窓のない部屋で、彼は床に寝転がされていたらしい。痛む頭を抑え、春樹はふらふらと立ち上がる。

「ちくしょー」

格子戸をがたがたと揺すぶる。

「おい、誰か居ないのか！　どういつつもりだ、こんなこととして！
叫ぶこと数分。春樹がいい加減疲れてきた頃、彼の呼び声に応えるように靴音が近付いてきて、やがて春樹の目の前に一人の青年が立った。」

「お初にお目にかかります」

柔らかく微笑むその青年は、黄金色の髪とエメラルドグリーンの瞳を持っていた。年は春樹より少し上だろうか。白いゆったりとした衣服には金系の刺繍が施されているが、それは見覚えのあるものだった。

「司教……？」

春樹はぼんやりと呟く。まさかここで教会関係者に会うとは思わなかった。

青年は頷く。

「私は旧北京市にある大聖堂の司教、カイル・エル・ムードと申します。お見知りおきを」

格子戸を通して白い手が差し入れられるが、春樹は彼の顔を睨みつけたままその手を取ろうとはしなかった。

「なんで司教がこんなところにいるんだ。『BGS』の地下組織とどういう関係がある！」

春樹は頭に血を上らせて言い募った。

「それに、教会といったら対『BGS』強硬論の急先鋒じゃないか！」

カイルはゆつくりと頷く。

「おっしゃるとおり。『BGS』は神の十戒に背く存在であるという我々の教義を、否定する気はありません」

「じゃあ何で……」

カイルは差し出していた手をすつと移動させ、春樹の目の前に掲げた。春樹は押されたように黙り込む。

「『BGS』と我々の関係が今のままでいいと思っている人たちなど、どこにもいませんよ。敢えてあげるならARMADA関係者だ

けでしょう」

「……………」

春樹はむつつりと黙り込んでカイルを見つめる。その視線の険しさなどには無頓着に、カイルは微笑みを崩さない。

「『BGS』が忌避される所以は、その力にある。人を殺す力、そしてその他にも　彼らは他の人間とは異なった能力を持つ」

カイルは春樹の目の前に掲げていた手を下ろし、両腕を軽く左右に開いた。

「『BGS』たちはPHY指数、PSY指数など様々な点で一般人よりも勝っている。その力を企業たちのために使うから、余計に市民に嫌われる」

「……………その、ファイ指数とかサイ指数ってのは何だよ」

話の腰を折る春樹にも、彼は嫌な顔一つしなかった。

「Physical指数。言わば体力を測る指数です。PSY指数は知力の方」

「……………」

春樹は視線で話の先を促す。さつさところから出て帰りたいのはやまやまだが、この部屋から出る術がない以上カイルの話聞く以外選択肢がない。

「神に背く力を持つ『BGS』であっても、知力や体力は恵まれている。その恵まれた才能を持って社会に貢献すれば　市民たちは受け入れるのではないですか？」

「あり得ないね」

春樹ははき捨てた。

「そんなことで上手くいくなら、『BGS』たちが企業に属して働いている今だって同じことじゃないか」

「違いますよ」

カイルは笑って首を横に振った。

「企業の為に使うのではない　人類の為に使うのです」

「は？」

「企業に決められた方法に拠って使うのではなく、自ら選び取った方法で」

「どうやって選ぶんだよ。そんな状況じゃないだろ、今は」

「今は……ね」

カイルは意味ありげに微笑んだ。

「でも、この組織にいる人々は、私の意見に賛同してくれています。自らの手で自分の生を掴み取りたいと。生き方を選びたい、とね」

「……………」

カイルは滑らかに言葉を続ける。

「彼らが真に神に帰依すれば、彼らが生来神に背いた存在であることなど問題にはならない。ですから、私は」

「カイル様！」

大声が廊下の向こうから響き、こちらに駆けってくる足音が聞こえた。カイルは言葉を切って振り返る。

「何事ですか？」

彼の目前で敬礼をし、男は口早に言った。

「ARMADAにここが勘付かれた模様です。早く聖堂にお戻りください」

カイルはその形良い眉を軽くひそめた。

「……………そうですか。やはりこの男を誘拐したのはやり過ぎだったようです」

その口調には何の感情もない。

「分かりました、ここを出しましょう。この組織はもう……………」

カイルは肩をすくめる。男は再び敬礼した。

「はっ」

「ちよい待て！」

春樹は声を上げた。

「俺はどうなるんだよ！ このままかよ！」

「私はここの鍵を持っていませんので」

カイルはくすつと笑う。

「大丈夫、すぐに助け出してくれますよ」

「誰が?!」

「ARMADAの……『BGS』たちがね」

歯を食いしばる春樹を横目で見遣り、カイルは身を翻す。その後
に男が付き従った。

「くっ……」

春樹はその後姿をじっと睨みつけていた。

第四章

1

硫平「鈴摩をリーダーとするU-20の「BGS」たちは、邑慆から説明された「FFA」の本拠ビルの周辺に配置された。高度数百メートルの位置には彼らを援護するための軍用ヘリが配備されているのだが、ARMADAの技術力は無音の滞空を可能にしている。目を凝らして空を見上げない限り、誰も気付くことはないだろう。」

『硫平君？』

彼の耳元につけられた通信機から邑慆の声がした。「BGS」が任務に就くときは大抵邑慆自身がその指揮をとる。

「はい」

口元の小型マイクで応答すると、

『今はまだ待機していてくれ。春樹「辰川がビル内のどこにいるのかはまだ分からないんだ」』

「これから分かるんですか？」

意外そうに聞くと、邑慆は肯定の返事を寄越した。

『ああ。レイ「白瀧が件の情報屋に協力をとりつけてくれればね」』

「どういうことですか？」

硫平は通りの様子をうかがった。ARMADAの「BGS」たちが着用する黒い制服がちらほら見られるせいか、郊外とはいえ決して辺鄙な場所でないにも関わらず、人通りはほとんどない。

相変わらず嫌われてるんだな。硫平は苦笑するが、耳に流れ込む邑慆の声にすぐに意識を引き締めた。

『我々が表立って「FFA」のコンピュータにハッキングをかけるわけにはいかないだろう？　だが、情報屋なら構わない。ハッカーと名乗ることさえ彼らの勲章なのだから』

「……………」

『その情報をもらつて、我々が行動する。ギブアンドテイクだよ』

「……分かりました」

声のトーンが下がったことを、自覚する。そんな重要な役を何故新人のレイに任せるんですか。聞いたかったが聞けなかった。

硫平はぐつと拳を握り締める。鼻肩しているんですか。してい

るんだとしたら、何故……。

聞けない。

硫平を始めとする「BGS」たちに、ARMADA以外の居場所はない。その保証を受けるため、彼らは率先して任務を受けて行動する。多少の危険が伴うことも厭わずに、彼らは懸命に働く。ARMADAに認められるため 邑慥に認められるため。

硫平はU-20の中ではトップを占める地位にいる。チームで行動するときにはリーダーの役割を任され、単独任務につく回数も他の誰よりも多いだろう。それは邑慥に有能だと評価されているということ。唯一の硫平のアイデンティティ。

だが、それは硫平に限ったことではない。親から、社会から見捨てられた「BGS」たちは、自分という存在を受け入れるために他者からの評価を必要とする。この場合、評価してくれる他者は邑慥以外いない。彼以外の人間はほとんど彼らを評価など 否、一個の人格を持つ人間と認めることなどしない。

『じゃあ、また連絡するよ』

邑慥の柔らかな声が、硫平の強張った心を優しく慰撫する。

「はい」

『気をつけて。僕は君たちを信頼しているから』

信頼。その言葉が、硫平の喉を詰まらせた。

『頼んだよ』

「……はい」

硫平は軽く眼を閉じた。

PM13:00。

リイは昨夕からずっと部屋にこもりきりになっている。
キラは時折ソファでうたた寝しながらも、ベッドには入ろうとはしなかった。

はるちゃん……。時折きゅっと握り締められる拳は小刻みに震える。

サンドウィッチをリイの元に運び、キラも幾つかつまんで簡単な昼食を終えた頃、インターフォンが鳴った。

「はい？」

「待て」

玄関に出ようとしたキラをリイの声が呼び止める。

「こんなときだ、誰か分かん。私が出る」

「……うん」

キラを退かせ、春樹の部屋から出たリイはまずモニターを確認した。映っているのは見覚えのない少女である。ただし、その制服には見覚えがあった。
ARMADA。

「誰だ？」

警戒心も顕わに聞く。

少女が無表情に答えてくるのが見えた。

『ARMADAの「BGS」部隊、チームU-20所属のレイ』白
瀧です』

「それで？」

『春樹』辰川氏の件でお伺いに上がりました』

リイは眉を寄せる。ARMADAは春樹の身の上に起こった出来事を既に知っているのだろうか？ それとも偶然に他の用件があったのか？ 判断がつかず、曖昧な言い方でやり過ごした。

「春樹なら居ないが？」

『知っています』

少女の表情からは何も読み取れない。リイは苛々した。

「用件をはつきり言って欲しいんだが」

レイは冷静さを保ったままモニターを見つめ、さらなる切り札を提示した。

『「FFA」のことで……と言ったほうがいいでしょうか？』

「……………」

リイは息を呑んだ。春樹が「FFA」に誘拐されたことをARMADAは既に知っている。さらに、それに対して何らかのアクションを起こそうとしている。それがどういうことなのか、判然としない。一般的に見てARMADAは「BGS」を保護する立場にある。「FFA」も所詮「BGS」の作っている団体なのだから、ARMADAと敵対するのは理屈に合わない。

『時間ありません』

少女の言葉にリイははっとした。

「時間……………」

『ここに私がいるとご迷惑が掛かります。中に入れていただきたいのですが……………』

「……………」

確かに、「BGS」がここにいることを近所に知られては厄介だ。「BGS」と何らかの関係があると見られて、春樹らまでもが後ろ指をさされかねない。リイが逡巡しているうちに、彼女の背後に立っていたキラが走り出していた。

「キラ！」

リイの声にも止まることなく玄関に向かい、もどかしげな手つきでドアを開ける。

「……………」

驚いたような顔で立ちすくんだ少女に、キラは飛びついた。紅茶色の瞳が涙をいっぱい湛え、レイを映し出す。

「お……………お願い」

幼いキラでさえもARMADAの存在、そしてARMADAの持

つ世界への影響力の強大さを良く知っている。だからこそ。

「はるちゃんを助けて。ねえ、お願い」

彼女よりは六つほど年上のBGSの腕をがくがくと揺すぶった。

「何でもするから。はるちゃんのためなら何でもする」

「……キラちゃん」

リーのかけた声も彼女に届いては居ないのかもしれない。

「……………」

レイは吸い寄せられるようにじっとキラを見つめていた。な

んて綺麗な、目。レイは場違いにもそんなことを思う。

やがて耐え切れなくなっただように、その瞳は涙を溢れさせた。

「ね……ねえ、お願い」

レイはそつと手を伸ばす。少女の頭と背中に手を回して自分の方に引き寄せた。

「……………」

キラの動きがぴたりと止まる。

「BGS」。大企業ARMADAの代弁者。そんなものはどこにも居なかった。キラを慰めるように抱擁する、それはただ一人の少女だった。

「……私は」

彼女の髪を梳きながらレイは呟く。

「私たちは春樹さんを救うために今行動しています」

キラが落ち着いたと判断したのか、レイはそつとキラの体から手を離れた。視線を動かしてリーを見つめ、

「ですから、貴方のご協力が欲しいのです」

レイの黒曜石のような瞳が煌く。それはまるでキラの瞳からうつたような濡れ方で、しかし、

「リー……スピアフィールドさん。お願いします」

彼女が深々と頭を下げたせいで見えなくなった。

「……………」

リーは少しだけ考え、やがて緩く頷いた。レイと名乗った少女自

身に悪感情を持つてはいないが、「BGS」やARMADAに対する警戒心がないわけではない。それでも実際、春樹を救うためには他に有効な手立てがないのも事実だった。

「分かった。私の持ち得る限りの情報をそちらに提供しよう」

キラの表情がぱつと明るくなる。

レイは初めて表情を動かした。柔らかな笑みがその瞳や頬、口元を満たす。

「ありがとうございます」

そして彼女はもう一度深々と頭を下げた。

もし彼女が「BGS」ではなく、ARMADAにも所属していなかったら。リイはふとそんなことを考えた。年齢の近い彼女たちは、友達という出会い方をしていたかもしれない……。

3

邑慆のオフィスにある通信機器が、着信を知らせる音を鳴らした。

「レイ……か」

NO・00の文字をモニターから読み取り、邑慆は表情を引き締めた。「BGS」である彼女が一般人であるリィースピアフィードの協力を引き出せるのか、実は少々心もとないところではあったのだ。

レイのせいというわけではない。それがこの社会というものの姿なのである。

邑慆は手を伸ばして回線をオープンにした。

「レイかい？」

『はい。邑慆さん』

レイの声音を聞いて、邑慆はほっと安堵した。任務に出る前と比べ、どちらかといえばリラックスしたトーンで喋っている。ということとは……。

「成功だね？」

『リイさんは私たちに協力することを約束して下さいました』

「そうか。良かった」

邑慆は机に肘を突き、軽く前髪をかき上げた。これで「FF

A」の命運も決まったな。口元を意地悪な笑みが彩る。

『情報やはどこに送れば良いですか？』

「そうだね……僕がARMADAのサーバに持っているアドレスのうちの一つに送ってもらおうかな？」

『邑慆さんの？』

「そう。僕が一通り眼を通して、内容は取捨選択してから硫平たちに回すよ」

『分かりました』

邑慆はアドレスを指示し、レイが復唱する。それが済むと、レイは邑慆の言葉を待つように口をつぐんだ。邑慆はモニターを見つめ、静かに微笑む。そこに彼女は映っていないが、今彼女がどんな顔をしているのか、彼には分かるような気がした。そして彼女にもきつと、彼の顔が見えている。そんな気がした。

「レイ、ご苦労様。彼女にサーバとアドレスの指示だけしたら帰ってきていい」

『……はい』

「初任務は達成だ、おめでとう」

『……春樹さんが』

「え？」

『春樹さんが、無事に帰ってきてから』

レイは口ごもりがちにそう言った。

『その後、喜びます』

「……………」

邑慆は笑みを深めた。彼女に何かあったのだろうか。自分の内面を人に伝えない傾向にある、と聞いているレイが、こんなことを自分に言うなんて。それとも僕にだから言ってしまうのかな？

邑慆は頬杖をついたまま軽く眼を閉じた。

「君は優しいね」

『え？ あ、いえ……』

レイは何となくしどろもどろになっている。もしかすると照れているのかもしれない。

邑慆はさらにくすりと笑った。

「君は、優しいね」

P M 1 4 : 3 0。

4

まだ先ほどと同じ場所に閉じ込められていた春樹の耳に、乾いた連続音が届いた。彼の知らない音 それは銃声。

P M 1 5 : 0 0。

第五章

1

春樹「辰川の誘拐を実行した「BGS」 カイト「オズマは今年で三十六歳になって、ちょうど別れた時の父親の年齢と同じになった。」

彼の家族が焼き打ちにあったのは三十年前のことになるが、彼の顔や体には未だ火傷の痕が痛々しく残っている。

彼はごく普通の家庭に生まれ育った。父親と母親、それに姉がいた。彼を除いては皆「BGS」ではなかった。父親が勤めていたのはBUI S系列の小さな会社で、彼の家はいわゆる中流に位置していた。平凡な、幸せな家庭 だが、彼がそこで過ごせたのはたった六年間のことだった。

今でもあの日のことは覚えている。その一週間ほど前、近所の誰かがカイトが「BGS」であることを嗅ぎつけてきて、辺りで大きな噂になっていた。窓ガラスが割られ、姉とカイトは外で遊べなくなった。父母はヒステリックに糾弾され、買物に出る母は時折怪我をして帰ってくるようになった。姉は学校に行けなくなった。

そして、あの日。真夜中、突然カイトは息苦しさに眼を覚ました。眼に入ってきたのはもうもうと立ち込める煙。そしてちらちらと廊下で輝いていた赤い炎。

逃げなさい、カイト！

母の声と父の罵声が聞こえた。

カイトが何をしたんだ！ 私たちが何をしたというんだ！！姉が咳き込みながら泣いていた。カイトは側で寝ていた姉の手を引っ張って逃げようとしたが、彼女は動こうとしなかった。

カイトには生きる権利もないというのか！！

それから先、彼の記憶にあるのは色と温度だけだ。真っ赤な炎の

色と、そしてその熱さ。そのことを思い出すたびに彼の体は汗を吹き出す。彼の心も体も、あの日のことを忘れていない。忘れることなどできるはずがない。

病院に運ばれて、気が付いた時には独りだった。家族のことを聞いても、誰も教えてはくれなかった。彼らは選択したのだ。「BGS」であるカイトと離れて生きていくことを。

その後、彼は「FFA」の前身となった組織に拾われた。そこには彼と似た境遇の「BGS」たちが幾人もいて、年若い彼を懸命に育ててくれた。それが彼の新しい家族となったが、だからといって家族を失った痛みが癒えることはない。今もずっと、痛み続けている。

ARMADAの施策が変わったのは、彼が成人した後のことだった。「BGS」保護政策と銘打たれたそれに、組織から抜けて参加するものもいた。カイトはそれはそれで構わないと思った。そこに彼らの居場所が見つかるなら好きにすればいいと。

だが、やがて考えは変わった。ARMADAが「BGS」たちにさせているのは軍隊まがいの強制任務だと思うようになったのだ。所詮「BGS」は企業の手駒としてしか扱われない。邑慆という男が「BGS」たちを幼少の頃から徹底的に教育かつ訓練しているのも、結局のところ「BGS」が自らの地位を高めるために役立つからだろう、と思った。それでは何も変わらない。「BGS」はこの社会では生きていけない。

彼の胸はいつでも一つの問いを叫んでいる。「BGS」には生きる権利もないというのか、と。

2

硫平の手元のモバイル画面が点滅している。リイが手に入れたピルの平面図のうち、春樹がいると思われたのは地下二階だった。レ

イが転送した地図を邑慥が分析して、彼の元へと送ってきたのである。

確かに、レイという少女は有能なのかもしれない。硫平もしぶしぶながらそれを認めた。何といっても「BGS」に対する警戒心の強い一般人の協力を取り付けたのである。それはつまり、邑慥がそれだけレイを信頼して任務を与えたということ。しかし、今そんなことを考えている場合ではない。

「……なるほどな」

ビルの出入り口の辺りの植え込みの影に身を潜め、硫平は呟いた。無線で繋がった仲間たちに向けて彼は告げる。

「第一目的は春樹＝辰川の奪還」

『了解している』

これはセルマの声。

「ビルの中で戦闘になったら怯まず撃つていい。できれば足か手。戦闘不能にしておけば、逮捕と牽引は別のスタッフがやるらしい」

『了解』

これは香龍。

「『FFA』と外部との取引記録も入手したらしいけど、それほど危険な武器は持っていないだろうということだ」

『ああ』

そもそも「BGS」の団体に武器を売ってくれるような物好きはいないのだが……。硫平は皮肉な笑みに唇を歪めたが、言葉だけは事務的だった。

「それじゃあ、正面からは俺と香龍、エイブと誠。あとはセルマを副長として裏口から突入」

『了解』

硫平はぐつと銃を握り締めた。冷たい汗を感じる。

「じゃ、始めよう」

彼らは一斉に行動を開始した。

「カイル様が?!」

「どこにもいらつしやいません」

「……………」

カイトはその報告を聞いて唇を噛み締めた。サブ・リーダーである彼が動揺を直に見せることはできないが、彼は暗澹たる思いに捕らわれている。見捨てられたのだ。

今、ARMADAが彼らの元に攻め込んできている。表向きの理由は春樹「辰川の奪還。だが、実際に彼らが意図していることは違うだろう。彼らはARMADAに従わない「BGS」を、野放しにしておくつもりはないのだ。

「奴らは今どこにいる?」

「春樹「辰川の居場所 地下二階に向かっているようです。現在一階で応戦していますが」

カイトらのいる場所は十階。ARMADAはひとまず春樹を救出することに重きを置いているようだ。だとすれば、隙はその後生まれる。しかし…………。

「武器が足りないな……………」

カイルが回してくれた違法改造済の武器があるが、数は少ない。銃すら十丁足らずしかなかった。

「オズマさん」

縫りつくようなまなざしを向けてくる仲間に対して、彼は何も言わない。

「俺たち…………何か間違ったことしましたか? 俺たちが何をしたって言うんですか?!」

カイトが何をしたんだ! 私たちが何をしたというんだ!! カイトの眉がぴくりと動いた。

「…………何もしなかった」

彼はぽつりと呟く。

「何もしなかったから、こうなったんだ」

「……え？」

カイトは軽く首を横に振った。

「階下に行こう。ARMADAの好きなようにはさせん」

「はい！」

青年は変に紅潮した顔で頷いた。死への恐怖の入り混じった、それでいて希望に満ち溢れた、妙な表情。そんな顔をする彼を、カイトは死なせたくないと思った。ARMADAはやはり俺たちを殺すのだろうか。もしこの青年が生き延びて、ARMADAで生きていくことが出来るのなら……。

「手遅れだな」

階下から響いてくる銃声に、カイトは乾いた声で呟いた。

「もう、遅い」

銃声。

4

硫平は壁の影に身を隠していた。相手が発砲してきたときには流石にひやりとしたが、性能の悪い旧式のものだと知って少し安堵した。あれではよほど自分の運が悪くない限りあたるまいし、彼らのように最新式の銃で毎日のように訓練を受けている者に勝てるわけがない。硫平は哀れさを催し、何度目かの叫び声をあげた。

「投降しろ！ 武器を捨てた者には攻撃しない！！」

ダダダッ！

返答は銃声だった。これではどうしようもない。硫平は軽く舌打ちすると、銃を構えて廊下へと飛び出した。

パン、パン、パン、パン！！

速いスピードで狙点を定め、引き金を引く。

「ぐっ！」

「いあ……！」

三人の男たちが足や手を抱えてうずくまった。硫平の隣りにいた誠が飛び出し、彼らの銃を奪い縛り上げる。

「くそっ……」

男たちは血走った目つきで彼らを睨みつけた。

「ARMADAの犬め……！！」

「……………」

硫平は彼らから奪い取った銃やナイフを集めて袋の中に仕舞い込み、誠に告げた。

「止血だけはしておいてやれ。だが、気をつけろよ」

「はい」

誠は頷いて一人の男の足に手をかけた。

ぷっ！

つばを吐きかけられ、誠は顔を強張らせる。

「触るな！！ 悪魔の手先め！！」

「悪魔……？」

硫平は怪訝そうな顔をして男を見遣った。その眼差しは静かな怒りに燃えている。

「誰のことだ？」

「決まっているだろう」

誠は怒りに顔を青ざめさせながらも手早く男の足を止血する。

「邑慆」社だ！ 『BGS』を手駒にしやがって……、道具みたい
に扱って！」

「手駒？」

硫平はふっ、と笑った。

「違うな」

「何が違うんだ。どうせお前らはあいつに洗脳されてるんだろっけ
どな」

吐き捨てるような口調の男に、硫平は哀れみのような笑みを向け

た。

「洗脳されてなんていない。俺たちが邑悖さんに従うのは、俺たち自身の意思だ」

「それが洗脳だっていうんだよ」

ぶつぶつ呟く男には構わず、硫平は誠に告げた。

「こいつらの見張りを頼む。怪しい挙動をしたら」
声を低めて脅す。

「撃ち殺せ」

「……………!!」

無論本気ではない。だが、男たちは大人しく黙り込んだ。

「俺は階下に行く」

「はい」

誠は頷いた。

硫平は銃を手に持ち直し、カートリッジを詰め替える。慣れた作業を手早く終え、彼は階下に通じる階段を駆け下りた。 春樹のいる場所まであと少し。

5

ARMADAに戻ってきたレイを出迎えたのは、邑悖その人だった。彼に導かれるまま、オフィスに隣接した応接間へと通される。絢爛豪華というわけではないが贅を尽くされたその部屋は、現在の邑悖の地位を如実に物語っていた。

「お疲れ様」

彼はそう言つて微笑むと、レイにソファに座るよう勧めた。

「さつき硫平から連絡があつてね、いよいよ突入したらしいよ」

「そう……ですか」

レイは頷いた。その表情には緊張の色が濃い。

「意外にも相手は銃で武装していたらしいけど」

レイの肩がぴくりと跳ねる。邑慆はそれを見て取り、安心させるように優しく微笑んだ。

「大丈夫だよ。旧式なものだし、当たりはしないさ」

「……はい」

「いちおう後の指揮は他の人に任せてきた。僕は報告を待つだけ」
リラックスした口調で話す邑慆に、レイの表情も少し和らぐ。

「大丈夫、硫平はとても賢い子だからね。きっと上手くやるよ」

「はい」

レイは微笑み……やがて表情を引き締めた。

「あの、邑慆さん」

「何だい？」

邑慆の黒曜石の瞳が優しく煌く。

「『FFA』の人たちを逮捕して、その後 どうするんですか？」

「どうするって？」

邑慆は聞き返す。

「だから……その、処罰っていうんですか？ そういうのは」

「ああ……」

彼はあつさりと頷いて見せた。

「無論、我々企業が定めた法律というものがあるからね、それに従って裁かれることにはなるよ」

レイの瞳に影が落ちる。邑慆はすぐに言葉を継いだ。

「でも、彼らは『BGS』だ。少々情状酌量してもいいのじゃないかと、僕は個人的には思っているね」

邑慆のような立場の人間にとって、個人的に思うも何もない。彼がそう言うのなら、きっと「FFA」の人たちはそんなにはひどい処罰をされないだろう。レイはほっと息をついた。

邑慆はそんな彼女の表情を見遣りながら胸中で苦笑する。ご

めんね、レイ。僕は嘘つきなんだよ。

ちょうどその時、デスクの上の通信機器が鳴った。

「邑慆だ」

一瞬にして表情を消した彼が答えると、やや息を切らせた硫平の
声が届いた。

『春樹〓辰川を救出完了しました。負傷者はありません』

「ご苦労様」

邑慆はそう答えて微笑む。

「急ぎ帰還し給え。『FFA』の牽引はスタッフに任せていい」
『了解』

「春樹〓辰川は無事かい？」

『……無事すぎるくらいですよ』
硫平のその声に春樹の罵声がかぶる。

『おい、てめえ、恩にさせてんじゃねえぞ！　ってか何で俺がこんな目に……！』

「……………」

邑慆は肩をすくめた。正直、この少年に大して興味はない。
今のところは。

「その元気な人質さんには帰って貰い給え」
『はい』

硫平のげんなりした声がする。

「それじゃあ、後で」

邑慆はそう告げて通信を切った。真っ直ぐ見つめていたレイの瞳
に向けて、邑慆は笑みを浮かべる。

「大丈夫、春樹〓辰川も無事だよ」

「……良かった」

レイの脳裏にキラの顔がよぎった。

「それじゃ、そろそろ行こうか？　僕も仕事を残しているし」
「はい」

頷いて立ち上がり、レイは軽く礼をした。

「お邪魔しました」

「いや。いつでもおいで。また話をしよう」

「……はい」

レイは控えめに微笑んだ。

レイの靴音が遠ざかっていくのを感じてから、邑慥はようやく通信を開く。「スタッフ」たちに向けて。

『邑慥チーフ』

返ってくる静かな声に向けて、邑慥は告げた。

「いつも通りだ。分かっているね？」

先ほどまでとは全く違う、冷酷な声。

「僕自らが彼らを説得する。我々に恭順するように」

『はい』

「まあ大概はそれで転向するはずだが、もし……強情をはるものがいれば、仕方がない」

邑慥は軽く唇を湿し、囁くように告げた。

「殺せ」

第六章

1

先ほどまで散々当り散らしていた春樹はようやく口を閉じ、むつ
つりと硫平を睨みつけていた。硫平は硫平で春樹の視線など完全に
無視している。

正直、春樹はARMADAと関わりたくなどなかった。何といっ
ても相手は超巨大企業であり、ARMADAは四大企業の中でも特
にきな臭い。しかも助けに来たのが俺と同じ年くらいのやつだ
なんて！ 何となくプライドが許さない。

「春樹」辰川」

硫平がちらりと春樹の方を見遣って口を開いた。

「我々の任務は完了だ。後は好きにしてい」

「そうかよ」

春樹はぶすつとしたまま答えた。硫平の態度が倣岸なものに思え、
礼をいう気にもならない。

硫平は軽く眉を上げたが、口に出しては何も言わなかった。

「とりあえず、この建物ではまだ俺たちの仲間が戦ってる。気を付
けるよ」

「……ああ」

春樹はとりあえず頷いたあと、気になっていたことを硫平に尋ね
た。

「奴らを殺すのか？」

「………」

硫平は複雑な表情をして春樹を見つめた。悲しげな、寂しげな…
…それでいて蔑んでいるような、そんな表情。

「何で殺す必要がある？」

「……いや」

春樹は口ごもった。

硫平は冷たい微笑を浮かべて言う。

「お前も思ってたのか」

「え？」

「お前も俺たちを殺人鬼だと思ってんのか」

春樹は驚いて首を横に振った。先ほどの無愛想さはどこへやら、すまなさそうな表情になって呟く。

「……わりい」

硫平は意外なものを見たように春樹を見つめた。

「何がだ？」

「いや……」

春樹は口ごもる。

「何ていうか、その……一応助けてもらったわけだし」

「『頼んだ覚えはない』んじゃないかったのか？」

それは先ほどの春樹の台詞だった。春樹は参ったな、というように頭をかく。

硫平はくすりと笑った。それは今までのシニカルなものとは違う、かなり感じの良い笑みだった。

「気にすんなよ。慣れてる」

「……何にだ？」

「『殺すのか？』って聞かれることにさ」

「……」

春樹は黙り込んだ。

硫平は飄々とした表情を崩さない。

「でも、殺したことがないとは言わないぜ」

「……」

春樹がびくつと体を震わせた。

頭上で散発的に乾いた銃声が響いている。硫平は顔を緊張させて天井を見遣った。

「さて、俺も合流するか」

「……お、おい！ 俺はどうしたら」

「ああ、もう帰っていいぜ」

硫平は不敵な笑みを浮べて春樹を見つめた。

「流れ弾に当たらないようにな」

「……なあ」

春樹はこの目の前の少年に興味を持ち始めていた。同年齢でありながら、熟練された兵士のような 事実そうかもしれないが身のこなし。澄んだ茶色の瞳は、どこか醒めた冷たさを宿している。

「名前、教えるよ」

「何で？」

「知りたいからに決まってるだろ」

「……」

硫平は少し躊躇した後、表情を緩めた。

「硫平だ。硫平＝鈴摩」

「硫平、な」

春樹は呟き、右手を差し出す。

「この手は何だ？」

「握手だ」

春樹は半ば強引に硫平と握手した。

「また会おうぜ」

そう言って春樹は笑う。

「俺は借りは返す主義だからな」

「……」

硫平はニツと笑ってぎゅっと彼の手を握った。それは春樹の初めて見た、硫平の年齢相応な笑顔だった。

「オーケー。期待してるぜ」

「おう」

硫平の手の皮は分厚く、固い。 だが、その暖かさは春樹のものと同じだ。

「じゃーな」

春樹は硫平に背を向ける。硫平は苦笑を浮かべてその背を見送った。

2

カイトらは次第に追い詰められていた。所詮旧式の銃しか持たぬ彼らに勝ち目はない。

「くっ……」

幾人もの仲間が負傷し、捕われていった。捕われた仲間がどうなるのかは全く分らないが、あまり樂觀は出来ない。

邑慄「社は信頼できない。彼は「BGS」に甘いと言われ、「BGS」たちの権利の守護者であるかのような言い方をされている。しかし、カイトはそうは思っていないかった。ARMADA内にいる「BGS」たちには確かに優しいのかもしれない。しかし、彼が事あるごとに「FFA」の活動を妨害し、現にこうして潰しにかかっているのを見れば、一概に「BGS」に対して理解があるなどとは言えなかった。おそらく、彼は「BGS」を利用しようとしているのだ。決して「BGS」たちの利益のためではなく、彼自身の目的のために。それが何であるのかは分からないが……。

「ああ」

隣りで銃を手にしていたリーダー、シヨウ「柳沢が言った。

「カートリッジが切れた」

銃弾はもうない。彼が言いたいのはそのうちのことだ。実はカイトもほとんど手持ちがなかった。既に彼らがいるのは最上階。もう逃げ場はない。カイトより少し年上の彼の顔には、疲労が色濃かった。

「カイト」

「何です？」

「……もう、無理だな」

「え？」

聞き返すと、柳沢は静かな微笑を浮べてカイトを見た。

「今までありがとう。……運命に、少しでも抵抗できてよかった」

「何を……」

カイトは手を伸ばしてリーダーの腕をつかもうとしたが、その指先は虚空を切っただけだった。柳沢は、身を翻す。

「俺は、捕まらない」

「……っ!!」

思わず彼を追おうとしたその背に、隙をついてARMADAの「BGS」たちが飛びついた。

「おい、放せ!!」

もがく彼の腕に超合金の手錠が嵌められる。

「柳沢さん!!」

カイトは声を振り絞って叫んだ。

「柳沢さん!! 柳沢さん!!」

カイトが心から尊敬していたリーダー、柳沢。彼が何をしようとしているのか、彼には分かっていた。

「柳沢さん」

気位の高い彼は、きっとこんな風に捕まることを潔しとしない。

柳沢の両親は「BGS」である彼を捨てて逃げた。そのとき柳沢はまだ五歳だったという。社会の底辺を這いずりながら生き、それでいて決してプライドを失うことはなかった。

一人で生きていたカイトに手を差し伸べてくれたのも彼だった。

もう一人ではないよ、と。そう言った彼の言葉が忘れられない。薄汚れたストリートチルドレンだった彼に、独学で身につけた読み書きを教えてくれた。何度もあの夜の夢を見て飛び起きるカイトを、優しく宥めて寝かしつけてくれた。

二人はまるで兄弟のように、共にこの社会を生き抜いた。やがて彼らは「BGS」のための組織「FFA」を作り、自分たちが本当に幸せになるために、何が 필요한のかを探し始めた。迷走を続けな

がらも、彼らはいつかそれを手にいれるはずだったのに。それなのに……！！

ズウン。

「……………」

地響きのような音が聞こえた。カイトはふっと力を抜く。

柳

沢……さん……。

頭上でARMADAの「BGS」たちが会話していた。

「何の音だ？」

「誰か飛び降りたらしいぜ。捕まりたくないって」

「……ふうん」

その声には曇りがあつた。同じ「BGS」である柳沢の末路を哀れんでもいるのだろうか。カイトは小さく笑った。哀れみなど、彼にはふさわしくないのに。

「素直に捕まってるや、生きられたかもしれないのにな」

どうやって？ 「ARMADA」に恭順し、邑慥Ⅱ社の手先となつて？ それは本当に生きているといえるのだろうか？

「……俺たちには」

カイトはぼそつと呟いた。誰にも聞こえないくらいの声で。

「俺たちには生きる権利なんてないんだ」

カイトには生きる権利もないというのか……！！

「きつとそうなんだ、父さん」

カイトは床に伏したままぼそぼそと呟き続けた。

「大企業に所属すれば、生きることには許される……でも、それは俺たちの欲しかった『生きる権利』じゃない」

そして彼は 泣いた。

3

………昏い、昏い感情。

レイは手を真つ赤に濡らして、そこに佇んでいた。

「貴方達がいけなかったんですよ」

口の中から、意識せずに滑り出る台詞。

「『私』を裏切るから……」

膝をつき、冷たくなつたその骸にそつと触れる。

「結局貴方達は『私』を愛していなかった」

一体私は何を言っているの……？　これは何？　記憶？　記憶なの？

でも私のじゃない。じゃあ　「誰」の記憶　？

レイははつと眼を開けた。見慣れた自室。ARMADAの本社内に建てられた「BGS」専用居住棟の最上階、十三階にある彼女の部屋だ。先ほど邑慆のオフィスを出てから、彼女はここに帰つてきて少しうとうととしていたらしい。

体を起こし、小さく呟く。

「……変な夢」

夢、だろうか？　手に纏わりついていたぬめる赤い液体の感触は、とてもリアルだったのだけれど。

「記憶……じゃない」

確かめるように言い、レイは手元のコンピュータのディスプレイを見遣つた。メールの着信を告げるアイコンが点灯している。レイはメールを開いた。

はるちゃんが帰ってきました。

どうもありがとうございました。

キラ＝辰川

せがまれて教えた彼女のアドレスに、キラが送ってきてくれたらしい。

レイは頬を緩めた。

「……良かった」

キラちゃんが一人数にならなくて、本当に良かった。

「私みたいに……一人にならなくて、良かった」

レイは組んだ腕に顔を伏せる。

両親に捨てられたという想いを持つ「BGS」が大半を占める中、レイはそうではなかった。元々両親などいなかった、と思っている。無論彼女の存在がある以上両親がいたのだろうが、彼女の中にその存在の影響はほとんどないといっている。

幼い頃から、自分は一人だと思っていた。今も一人だ。そして、きつとこれからも一人。

「……そういえば」

レイはぼつりと呟いた。

「私、あの夢……何度も見ているような気がする……」

第七章

1

カイル「エルムードは教会内の自室に戻り、コンピュータを立ち上げた。メールボックスには案の定、ARMADAが「FFA」を制圧したことに恐れをなした「BGS」地下組織からのメールが溢れ返っている。

「やれやれ……」

金髪がばさばさと揺れる。

「相変わらず他人頼みなことだ」

ARMADAへの反乱　話を持ちかけたのは「BGS」組織の方だった。盟主としてカイルを　教会を戴き、ARMADAによる「BGS」支配に異を唱えようと。神に認められぬという刻印がない。「BGS」の中では意外にコンプレックスになっているのかもしれない。実際は人にも認められてはいないのだが。

それとも彼らは教会を利用しようとしたのだろうか。教会の傘下に入ったように見せることで、市民の「BGS」への偏見を和らげようとしたか。

実際、利用したのは僕のほうだったのだけど。カイルは皮肉な笑みに唇を歪める。

「今回は完敗、だな」

「FFA」のコンピュータを探れば、今回の騒動に加わろうとしていた組織のことなど一網打尽に知れてしまうだろう。各個撃破を狙われては、組織に勝ち目はない。恐らく、もたもたしているうちにやられてしまう。

「ま、僕はどこにも痕跡を残していないが」

カイルは椅子に深々と腰掛ける。

そもそもまだ機は熟していなかったのに、先走ったのは「FFA」

だ。危険を察した時点でカイルは側近に命じ、どの組織のコンピュータからも自分がこの計画に関わっていたという証拠を消した。その代わり、「BGS」を企業以外には許されていない方法で非合法に検査した結果は手元に残したのだから、今回のことが丸きり無益だったわけではない。それにしても……。

「ふふ、完敗だ」

以前何処かで会った、あの男を思い出す。自分と同年くらいのも、ARMADAの若き重役。黒い髪と黒い眼を持つ、天使の笑みを浮かべた悪魔。

「邑慆」社」

カイルの眉がきゅつと顰められた。

「あの男……何を考えている？」

「BGS」を集めて何をしようというのか……。

「アレクの言うとおり、ARMADAは世界制覇戦略でも練っているのか……？」

あの男の頭脳と「BGS」を使って……？ いや、何かが違うような気がする。邑慆はそれほどARMADAに固執しているようには思えない。彼にはもっと個人的な、何か……。

「ま、それはいい」

冷たく暗い眼差しで彼は呟いた。

「僕は僕で好きなようにやらせてもらおう」

たかがこの程度の失敗で、諦める自分ではない。

「それに、『BGS』はARMADAにだけいるわけじゃないし……ね」

彼はテーブルの上に置かれた電話を手に取り、慣れた手つきでナンバーをプッシュした。しばらくの沈黙の後、彼は滑らかなドイツ語で話し始める。

「やあ、アレクかい？ 僕だ、カイルだよ。……ああ、そう。もう君の耳にも入っていたんだね。実はそのことで電話したんだ……」
受話器の向こうから流れる低音にしばらく耳を傾ける。

「そうか。それは好都合だ」
彼のサファイアの瞳が鋭く煌いた。

2

オズマは白い服を着せられ、窓のない部屋に拘禁されていた。部屋の隅にはベッドと椅子、ドアは分厚い金属製。トイレは別室になっている。

「……………」

オズマはベッドに腰掛け、床の一点を見つめていた。いつ殺されるのだろう。いつそ早く殺して欲しい。

ARMADAの職員だか「BGS」だかが何かを聞きだそうとしていたようだが、オズマは一言も言葉を発しなかった。さすがの彼らも諦めたらしい。

「ふう」

ため息が何もない空間に溶けた。

カツン。

オズマはぴくりと肩を震わせる。遠くから、廊下を人が歩んでくる音がする。

カツ、カツ、……。

靴音はオズマの部屋の前で止まり、やがて鍵が外される音がしてゆっくりと扉が開いた。

「やあ」

声を聞いたとき、オズマは耳を疑った。はじかれたように顔を上げる。

「お初にお目にかかるね」

まるで旧友に会ったかのような表情で、彼に歩み寄ってくる男。たった一人の護衛もつけず、「BGS」の目の前に現れた、この非常識な男は。

「邑慆……社……」

呆然としたオズマの顔を見て、邑慆は笑みを深めた。

「名乗る必要はなさそうだ」

「当たり前だ」

ぽつりと呟いて視線を落とした。一瞬動揺の起きた心も、今は冷え切っている。

「僕もいつの間にか有名になってしまったね。やっぱり悪名高いのかな？」

「……………」

「相変わらずのだんまりかい？」

「……………話すことなど何もない」

「そうか」

邑慆はオズマの向かいの椅子に腰掛け、その長い足をゆったりと組んだ。

「君たちが軽率な行動をしてくれたおかげでクーデターは未然に防げたよ。お礼が言いたいくらいだ」

「……………」

「今、それぞれの組織の本部に『BGS』部隊が向かっている」

「……………そうか」

今更、怒りも湧かなかった。邑慆はそんな彼に探るような視線を向ける。

「君は何故、ARMADAに来なかった？」

「何？」

オズマは思わず顔を上げた。

「ここに来ればもっといい生き方が出来た。君のような有能な人を、僕らは必要としているんだけどね」

「飼い殺された自由など、我々は欲しない」

「自由、ねえ」

邑慆は今までのものとは違う、嘲笑のような笑みを浮かべた。オズマは眉を寄せる。

「何がおかしい？」

「君たちは自由が何だか分かっているのかい？ いや、君たちの思う自由が本当に存在するとも思っているのかい？」

「……どういうことだ」

「『BGS』でない市民だって、誰一人君たちの言うような自由な
ど持ち合わせていないよ」

「……………」

「企業に属しているのは何も『BGS』だけじゃない。誰しもが生
活の糧を得るために何れかの企業の中の一員として働いている」

「そんなことは知ってる」

「子供は親の影響を諸に受けて育つからね。親が経済的に豊かなら
それなりの教育を受けられるし、そうでなければ」

邑慆は言葉を切り、首をすくめた。

「分かるよね？」

「親といわれるだけ幸せと言うものだろう！」

オズマは思わず激昂した。

「俺など……俺など！」

「そう。大抵の『BGS』は親とは一緒に居られない」

邑慆は平然と彼の怒りを受け流す。

「でも、『BGS』には うちにいる『BGS』には、等しく高
水準の教育が与えられる。教育だけじゃない、生活も保障される。
他の企業人と同じように仕事をしてさえいれば、無条件で」

「その代わりモルモット扱いをする！ 検査だとか何だとか言つて

……………」

「健康診断のようなものだよ。おかげで『BGS』たちはとても健
康に暮らしている」

「……………」

「恋愛も婚姻も勿論自由だ。まあ、住居とか職種はあまり選べない
けど、それがそんなに大したことかな？」

「……………」

「残念だ」

邑悖は緩やかに首を横に振りながら立ち上がる。

「とても残念だよ」

「……ひっ」

オズマの喉が小さく鳴った。

その日の夕食を運んできた看守は、天井の梁に首をくくって死んでいるオズマを発見した。

3

オズマの「自殺」の翌日から、ARMADAは本格的に「BGS」地下組織掃討作戦に乗り出した。

硫平を中心としたU-20チームは勿論、O-20 Over 20も参加し、騒乱罪を適用して片っ端から逮捕、牽引した。ほとんど不意をつかれた形となったそれらの組織は、応戦したものの次々に制圧され、結果一週間も経たずに全組織が潰えた。

驚くべきことに、その構成員の九十パーセント以上の者がARMADAの「BGS」部隊に属することとなった。

春樹の元をレイが訪問したのは、一連の騒動が終わってしばらくした後だった。実は、今回の掃討作戦に、レイは全く関与していない。

「君はまだ少し早いからね」

邑悖はそう言って微笑んだ。優しいその笑顔はまるで兄のようで、それでも彼女に指令を下したときの彼は既に指揮官の顔だった。

「その代わり、春樹」辰川の元に行って欲しい」

「はい」

レイは頷く。

「ミス・リイにはお礼、春樹、辰川には見舞いを述べてくれ。AR MADAの代表として、頼むよ」

「はい」

僅かながら強張った頬を、邑慥はその指の甲でそつと撫でた。

「大丈夫、大したことじゃないから。君ならできるよ」

「……はい」

レイの表情は浮かない。その原因は彼にはすぐ分かった。邑慥は優しく微笑んで彼女の肩をぽん、と叩く。

「今回のことでは君たちも辛い思いをしたらだろうけど」

「BGS」同士が争うなんて……考えたくなかった。少し俯いた彼女に、邑慥は言葉を継いだ。

「でも、結果的には沢山の人が仲間になってくれただろう？ そのことは良かったと思えるよ。こんなことでもなければ、彼らは我々の元に来る機会はなかっただろうからね」

「……そうですね」

「最後まで我々の仲間になることを拒んだ者もいたけれど……僕も力不足で、どうすることもできなかった」

「それは、邑慥さんのせいじゃ……」

言いかけてレイは口をつぐむ。そういう者は大抵自殺してしまった、と聞いたことを思い出したのだった。

しかし、邑慥は一つため息をついて明るい表情を取り戻す。

「大丈夫だよ。少しずつ良くなるさ」

「……はい」

先ほどから変わらず短いレイの返答だが、それぞれの声にはその時々違った色がついている。邑慥は少しずつその言葉の裏にあるレイの感情を読み取れるようになっていた。そのことに彼は非常に満足している。

最後に彼はレイと目線をあわせ、にこりと微笑んだ。

「さあ、行っておいで。気をつけてね」

「はい」

　　邑悖といるときの自分が一番表情豊かであることに、レイはまだ気付いていなかった。

4

キラは朝から大掃除をしていた。春樹はそんな彼女を横目で見てため息をつく。

「お前、何張り切ってるんだ」

「だって、今日はレイちゃんが来るんでしょ？」

「レイちゃん……てなあ」

　　泣く子も黙るARMADAの「BGS」だぞ？　春樹はその言葉を飲み込み、もう一度ため息をついた。

　　ARMADAからメールが届いたのは昨日の晩。今日の昼過ぎ、U-20のナンバーダブルオー、レイ＝白瀧をそちらに向かわせるとあった。

「何でそんな懐いてるんだ？」

　　隣りのソファに座っているリイに問いかけてみるが、彼女は苦笑して首を横に振った。

「さあな。よく分らん。ただ……」

「ただ？」

「イメージとは、違った」

「……」

　　春樹が硫平に対して思ったのと同じようなことを、リイは感じたらしい。

「礼儀正しい、真っ直ぐな眼をした子だったよ」

「……そうか」

「そんなことより」

　　リイは椅子に深く座りなおした。

「今回のことでARMADAの擁する『BGS』の人数はさらに増えたな」

「ああ」

「どうやら邑慄Ⅱ社自らが敵対組織の『BGS』の説得に当たったらしい」

「へえ」

「九割の転向率ってことは、彼の話術は並大抵じゃないってことだ」
「……けどさ。残りの一割は」

「ああ。怪しいな」

リイはあつさり頷いた。転向しなかった者の全てが自殺など、常識的に言ってあり得ない。

「殺された……と考えるのが妥当かな」

「ARMADAの『BGS』が殺したのか……？」

「さあ？ それは分かん」

彼らを精神的に追い詰め、自殺という方法を選び取らせることも不可能ではないかもしれない。たとえば、薬物を使って……。

「医薬部門に優れたARMADAになら簡単なことだろう」

「……嫌な話だな」

春樹はため息をついた。

「結局、『BGS』は利用されているだけなんじゃないか」

「……………」

リイは皮肉っぽく唇をゆがめる。

「何も『BGS』に限ったことじゃないさ」

「え？」

「市民のほとんどが企業に利用されている。国があったときは、国家に利用されたようにな」

「……………」

「お前や私のように、下町で自由気ままに生きている人間は、そう多くはない。好みもしない仕事を強いられて生きている。それが大半の人間の生き方だよ」

「……………」

春樹はキラの小さな背中を眼で追いながら、ぽつりと呟いた。

「……そうかもな」

ピンポーン。

「あ、レイちゃんだ！」

弾んだ声で玄関に向かう彼女を見ながら、春樹は妹の いや、

この世界の未来を思い 気分が沈んだ。

第八章

1

一貴は邑慥からの呼び出しを受け、彼のオフィスへと向かった。空高く聳えるARMADA社のビルを見上げ、ため息をつく。

「何やってんねん、邑慥……」

彼は邑慥という男をそれなりに良く知っている。おそらく、彼の部下の誰よりも付き合いは長い。だからこそ、今回の騒動の結末は一貴には許し難かった。

最上階まで専用エレベーターで上り、彼のオフィスの扉を開けて開口一番。

「元々死なすつもりやったんやろ」

珍しく地の底を這うような低い声で、一貴は言う。何か作業をしていたらしい秘書の女性がぎょっとしたように一貴を見た。艶やかな長い栗毛は、どれだけの手間隙を掛けて手入れされているのだろうか。

デスクに座ってコンピュータに何かを打ち込んでいた様子の邑慥は顔を上げ、彼を見て首を斜めに傾げる。

「何を言ってるんだい？」

「席を外しましょうか？」

女性の声に邑慥は軽く頷いた。

「ああ、頼むよ。話が終わったら呼ぶから」

「はい」

「……………」

一貴は黙って邑慥を睨んでいる。

「あの子ね」

邑慥は飄々とした様子で女性の出て行ったドアを目線で指した。「会長のお孫さんか何かなんだよ。もう、思惑が見え見えだよね」

「つまり……お前とくつつけたいつて訳か」

「そういうことじゃないかな？ 有望視してもらえるのは嬉しいけど、政略結婚なんで僕の趣味じゃないんだ」

邑慆はちらつと一貴を見遣った。

「でも、なかなか美人だし頭もいいようだ。君に紹介してあげようか」

「いるか！」

ついつい彼のペースに巻き込まれそうになっていたことに気付き、一貴は軽く咳払いをした。

「そんなことより。用件は何や」

「君のほうこそ、何か言いたいことがあったんじゃないのかい？

先に言い給え」

「……………」

一貴は仕方なく口を開いた。

「この間の『BGS』たちのクーデター未遂事件やけどな」

「ああ」

「拘束された奴らのうち、転向せえへんかった『BGS』は皆死んだやろ。裁判にもかかれんうちに自殺した」

「そうだね」

「それ、防ご思たら防げたん違うんか」

邑慆は穏やかな表情で頷いた。

「……なるほど、身体チェックをもうすぐ厳しくしておけばってことかい？」

「いや」

一貴ははっきり言葉を切って告げる。

「お前はわざとチェックを甘くしたんや。食事にもナイフ使うもん出したりして、あいつらが死にやすいように」

「証拠があるのかい？」

邑慆は毅然とした口調で一貴を遮った。

「何だって僕がわざわざそんなことをする必要がある？ 裁判に掛

けられればどうせ彼らは懲役刑に服することになるんだ」

「いや、それは……」

邑慆は厳しい表情で一貴を問い詰める。

「彼らを死に追いやって、僕が何か得をするとでも？」

「そんなん……わからへん。わからへんけど」

一貴はため息をついた。何故だか邑慆が傷ついた眼をしているように。本来一貴は邑慆を憎んでいるわけではないのだから、そんな顔をされると心が揺らぐ。

「今回の件は思い切りきな臭いやないか……。ようさん人も死んだしな。ここの『BGS』も、死者はおらんかったけど軽傷者はおった。なんか、疑り深うなってんねん」

「……………」

一貴の声は急激にトーンダウンする。

「もし……もし俺が間違ってるんやったらそう言つて。謝るわ。勘弁したつて」

「……………別に僕は怒っているわけではないよ」

邑慆は穏やかにそう言った。

「ただね……君に『人殺し』扱いされたのは心外だったな」

「そうつつもりやない！」

軽く手を振り、邑慆は一貴の声を散らす。

「今の『BGS』たちには二つの道しかないよね。いずれかの企業に属して企業戦士となるか、それとも、市民から迫害されながらも浮浪者として生きるか。どちらをも拒んだ者が今回組織を結成した

だけど」

邑慆は軽く肩をすくめた。

「そんなの、一般人だって同じなんだよ。道は二つ。企業戦士か、浮浪者か」

「……………」

「ね？」

「……………けど、『BGS』たちには市民権があらへんやろ」

「市民権、ねえ」

企業支配の世界で、市民権に一体どれほどの意味があるのか。選挙権も被選挙権も、もはやこの世界には存在しないのだ。

一貴はむっとしたように唇を尖らせた。

「市民として生きていく権利、ていうこつちゃ」

「ああ、うん、そういうことか」

「偏見とか差別とか……物凄いやん」

「そうだね。そのことについては否定する要素は何もない」

「そういう方面の改善は、企業としてせえへんのか？」

「できないよ、そんなの」

邑悸は苦笑した。

「人間社会っていうのはね、常に少数派を排除するようにできているんだよ。だから、福祉制度なんてものを人工的に作るわけだろう？」

「……せやな」

「僕らがやっているのも『BGS』に対する福祉だよ。受け入れない社会から保護して、企業体制下でその能力を存分に発揮させてやる。それが僕らにできることの限界だと思う」

流々と澱みなく述べ立てられ、一貴はぐつと詰まる。

「今回のことは悲劇だったと思うよ。結局二十名もの『BGS』が命を落としたわけだからね」

「……………」

「だが、別にそれは僕が仕組んだことじゃない。それに」

邑悸の黒曜石の瞳が艶やかに光った。

「死を選んだのは、彼ら自身なんだよ？ ARMADAの中で生きることもできたのにね……………」

「……………」

「オズマという、あの男……彼の自殺が大きく影響を与えたらしいけど」

「……………」

一貴はため息をついた。

「何でもええねんけどな……殺人防止遺伝子組み込んで、こんだけ人死んどつたら意味ないで」

邑慥は黙って一貴を見つめる。

「俺、嫌やねん。『BGS』でも一般人でも、何でもええけど。病死とか事故死とかやのうて、自殺とか他殺とかで死ぬの。すごい嫌やねん」

「そりゃあ、僕だつて嫌だね」

「……ほんまか？」

「まだ疑つてるのかい」

邑慥は大げさに肩をすくめてみせるが、一貴は悲しげな瞳を変えなかった。

「疑いたない。けど」

「……けど？」

「お前には、人命より優先してるものがあるような気がするんや」

「……」

「目的とか、なんか、そういうんが」

「……考えすぎだよ」

邑慥はふ、と微笑むと軽く椅子に座りなおした。

「さて、その話はその辺でいいかな？ 君を呼んだ用件について話したい」

「あ、……ああ」

邑慥はキーボードにその長い指を伸ばし、カタカタカタ、とキィを叩いた。

「このデータを」

「うん？」

一貴はスクリーンに映し出された数値を目を細めて追う。

「気付くことはないかい？」

「……」

一貴の表情が冷静な研究者のそれになる。

「これは……」

「そう」

邑悛は笑みを浮かべた。

「君の解析してくれた『BGS』のデータを僕なりにちよつと分析してみた結果なんだけどね」

「……ほんまや」

一貴の眉がきつく寄せられた。

「皆そろいもそろって、遺伝子の変異率がめっちゃ高い」

「ああ。特に二十代以下の若い『BGS』は九十パーセント以上の確率で、何らかの遺伝子変異を一般人よりも多く保持している。君に調査して欲しいのはそのこと。何がどのように変わって、これによってどのような影響が出ているのか」

一貴はごくりと唾を飲み込んだ。

「もしかして、これ……」

「そう」

邑悛は微笑んだ。

「『BGS』は一般人を置き去りに進化を始めている。そういうことかもしれないよ……」

2

レイが事務的な任務を終えて春樹宅を辞したすぐ後、彼女の連絡機に着信があった。

「はい」

「レイ？」

椿だ。どうやら良いことがあったらしく、声が弾んでいる。

「どうしたの？」

「私もチームにあがることになったのよ」

「……そう」

レイはそつと微笑した。

「これからは一緒に仕事できるといいわね」

『そうね！ レイには早く報告したくって』

「ありがと。もうすぐ帰るから、また話を詳しく聞かせて？」

『うん。それじゃあね！』

束の間の友人との通話。

レイはほつと息をつくとき、ARMADAから支給されている「BGS」部隊専用モバイルのロックを解除してまたがった。

一見してそうと知れるARMADAの制服を着ていると、どんなに混んだ道路を走っていてさえ彼女の周りには不自然な空白ができる。それだけ「BGS」は一般人に忌諱されているということはいくら慣れているとはいえ、レイの眉間には軽くしわがよった。

信号待ちのちよつとした間、目が合いそうになった一般人たちは露骨に嫌悪の表情を浮かべて眼を背けた。聞こえよがしに罵倒する者もいる。人殺し、と。

レイはハンドルにかけた手をぎゅっと握り締めた。人を殺したことなくない。殺したくなんて……ない。

ここには私たちの居場所なんてない。そのことを思い知らされたような気がして、一つ身震いをした。

早くARMADAに帰ろう。私の帰る場所はあるにしかないのだから。

「……そういえば」

風に黒髪を靡かせながら、レイはぽつりと呟いた。

「『FFA』の人たちは、結局何がしたかったのかしら……」

春樹「辰川を誘拐、監禁した疑いで『FFA』のメンバーはARMADAにより逮捕、牽引されたわけだが、彼らが一体何を目的としていたのかは知られていない。どうやらARMADAをはじめとする企業体制を眼の敵としていたようだ……。それがどうしてなのか、レイには分からない。彼女にとって、否企業に属する全ての「BGS」にとって、企業とは自分たちを保護してくれる唯一無二

の存在だ。それなのにどうして……。

気が付くとレイはハンドルをきり、「FFA」のアジトのあった方向へとモビルを走らせていた。一般にバイクとして売られているものよりは遥に高性能なモビルは、あつという間に彼女を目的地へと連れて行ってくれる。

町外れの再開発地区に、例のビルはひっそりと佇んでいた。

「ふう……」

モビルを路傍にとめてロックし、ARMADAの警備員らしき男に歩み寄る。

「U-20、ナンバーダブルオーのレイ」白瀧です。立ち入り許可をお願いします」

カードを見せてそう言うと、男は敬礼と共に頷いた。レイは会釈を返し、中へと入る。靴音が高い天井に響いた。そこかしこに残る弾痕と血だまり。ARMADA側の負傷者はほかすり傷のみだったと聞いているから、この血はおそらく「FFA」の「BGS」が流した血なのだろう。

何のために……。レイは眉を寄せた。彼らは何を望んでいたのだろう。どんな理想を追い求めて　そして挫折したのだろう。邑悸に聞けば教えてくれるだろうか。

「邑悸さんは……」

呟いて天井を見上げる。

「どんな世界を目指しているのかしら……」

ARMADAの重役として、そして一般人よりも優れた能力を持つ「BGS」たちのチームを統率するチーフとして。彼はどんな未来をその脳裏に描いているのだろうか。

「私は」

何を望んでいるのだろうか……。

「誰だ?!」

鋭い誰何の声に、レイははっと銃を抜き放った。銃口の先、佇むのは彼女と同じ制服。

「あ……」

慌てて銃をしまい、レイは答えた。

「失礼しました。U - 20、ナンバーダブルオーのレイ」白瀧です」
青年は驚いたように眼を大きく開け、やがて苦笑する。

「どこかで見た顔だと思った」

「……え？」

「俺はU - 20、ナンバーオーエイトの硫平」鈴摩。一応、U - 20の中ではチームリーダーを勤めている」

「あ……はい」

「今日は任務でここに来ただけ……」

探るような視線がレイを見つめる。

「君は何でここに？ 任務か？」

「いえ」

レイは首を横に振った。

「任務は辰川家を訪問し挨拶をしてくることで、そちらはもう済ませました」

「ふうん、そうか」

言った後硫平はにやりと笑う。

「ちなみにな、自分の任務内容は他人には洩らしちゃいけないんだぜ。たとえそれが仲間の『BGS』であつてもな」

「え？」

「ま、俺は別にいいけど。言いつけたりしないから安心していいよ」

「……はい」

硫平は栗色の髪をかき上げ、くるりと後ろを向いた。

「で。何でここに来たんだ？」

「……あの」

レイは軽く俯き加減になり、

「『FFA』って……何だったのかな、と思って」

「あ？」

硫平は顔だけで振り向く。

「どういうことだ？」

「あの組織の正式名称はFree From All……何から自由になりたかったのか、気になって、それで」

「一般人の偏見とか差別とか、そういうものからなんじゃねえの？」

「あとは企業？」

「企業……って」

「あ、そうか」

硫平は再び前を向き、独り言を言うように呟いた。

「まだ君は知らないよな」

「何を……ですか？」

「ARMADAは別に正義の組織じゃない」

「……え？」

「俺はいろんなもんを見てきた……人を殺した事だってある」

「……」

レイは慄然として硫平の広い背中を見つめた。

「それでも」

硫平は言葉を続ける。

「それでも俺はここに居る……。何故だか分かるか？」

「居場所が他にないから……？」

「違う。そんなネガティブな理由じゃない」

硫平は再び踵を重心にしてくるりと振り返った。彼のブラウンの双眸は、暗闇の中でもかすかに煌いている。

「ここが好きだから……さ。ここで過ごした自分の思い出とか、キヤリアとか、そういうもののひっくるめて全部好きなんだ」

友達も仲間も、ここにしかない。そして自分を認めてくれる上司も。

「好き……？」

レイは眼を瞬かせた。

「そう。好きなモノの為なら、多少の嫌なことだってできるさ」

「……好き」

レイは呟く。 私の好きなもの……今は、何も浮かばない。

「ま、そのうち見つかるんじゃないの？」

彼女の逡巡を悟ってか、硫平は軽く言った。

「でもな、好きなモノでもなきややっていけないぜ」

口調とは裏腹に眼差しは真剣だ。

「この世界は それほど俺たちに優しくないからな」

第九章

1

「FFA」のアジトのあったビルの屋上からは再開発地区が一望できる。風が強く吹き荒んでいた。

「そこから……」

硫平は風に首をすくめながら、

「自殺したんだってよ。柳沢っていう、ここのリーダーだった奴が」
「……………」

レイは端に歩み寄り、黙って下を見下ろした。地上からはおよそ三十メートルほどだろうか。ARMADAの本部近くにはこれの何倍もの高さのビルが乱立しているし、高所には慣れているはずなのだが、それでも柵もなくこうして立っていると純粹に怖い。ここから自ら身を投げたのか……。

「何でだろうなあ」

硫平はぼそつと呟いた。

「そんなにARMADAは嫌な場所かねえ……」

「硫平さんは」

レイはぼつりと言った。

「どうしてARMADAに？」

「……………」

硫平はレイの顔を見遣って笑う。

「普通だよ。新生児診断で『BGS』だと診断されて　そのまま家族とはおさらばさ」

「……………」
「……そうですか」

確か椿も同じ事を言っていた。そして、その話をしたとき彼女は……。

「会いたい、ですか」

「え？」

硫平がぎょつとしたような顔でレイを見た。

「あの、変なこと聞いてごめんなさい」

レイははっと気付いて頭を下げる。

「別に謝るほどのことじゃないよ」

硫平は苦笑した。

「家族に会いたいかって？ さあ、どうなんだろうな」

「え……？」

椿は会いたいと言っていた。

けれど、硫平は困惑したように眉を寄せている。

「正直覚えてないんだよ、両親の顔も何も」

「……………」

「そりゃそうだろう。生まれてすぐに離れて育ってるんだから」

「……そう、ですよ」

「向こうはどう思ってるんだろうな、とは思っよ。やっぱり普通母親は手放したがるなんて聞くし。でも」

硫平の髪が激しく風に煽られる。

「でも……俺の母親がそうだったかは分からないしな」

「……………」

「俺のことを思い出すときもあるのか……気にならないって言うたら嘘だけど。仕方ない。そうだろう？」

「BGS」である自分は家族と一緒に生きることとはできない。硫平はそう割り切っているようだった。

「ま、俺はそう思ってるけど。でもやっぱり会いたいやつもいるんだろうなあ」

まるで他人事のように彼はそう言った。

「どちらにせよ」

レイは寂しげに微笑んだ。

「私に両親は居ないから……同じことですけど」

レイが孤児院に引き取られたのは生まれた後すぐだったらしく、

「BGS」だと分かったのはその後だった。つまり 「BGS」

だと分かる前に捨てられた。そういうことだ。

「……………」

硫平は黙って少女の横顔を眺める。

「私は」

レイは目を伏せた。

「ずっとここに居ると思う。どんなことがあっても」

「……………」

「私を迎えに来てくれた人が、ここに居るから」

「……………」

「他には居ないから」

「……………」

と口を開きかけた硫平が、不意に警戒の表情を浮かべた。彼の耳が捉えたらしい足音を、一瞬遅れてレイも捉える。

ボタン、と階下に通じる扉が開いた。そこから走り出してくる数人の男たち。

硫平は咄嗟にレイの手を引き物陰に隠れた。

「やべえぞ、あれ……………」

「え？」

「あの制服、DOOMだ」

「DOOM……………」

ARMADAと同じ四大企業の一であるが、仲はあまり良くない。規模でいうとARMADAを少し上回るが、そろそろARMADAが抜くのではないかといわれていて、その辺りが不和の原因かもしれない。DOOMは最近急激に「BGS」を集めはじめ、今やARMADAに次ぐ人数の「BGS」を抱えている。「BGS」に関する研究も盛んであるらしい。

「ま、ウチほどじゃないらしいけどさ。それに」

「それに？」

「DOOMは教会とも仲がいいって話だぜ」

「教会……」

教会 「BGS」を敵視する輩の急先鋒。神の下した十戒に背く存在として、教会は手厳しく「BGS」を社会から排除しようとしている。

「なのに、どうしてDOOMは『BGS』を……？」

「ま、色々裏の事情があるんだろうよ。それはそうと」

硫平はレイの言葉を遮り話を変えた。

「俺とお前のモバイルを、奴らは下で見つけたはずだ」

「……………！」

確かに、何かを探すように視線をめぐらせている男たち レイは息を呑んだ。

「俺たちを見つけたら、どういう行動に出るか……分からないぜ」「どうします？」

額がじつとりと汗ばむのを感じながら、レイは硫平を見つめる。

この場合、経験豊富な彼の判断に従うのがいい。そう思った。硫平もその彼女の思考を読んだのだろう、軽く頷く。

「とりあえず俺が出て話を聞いてみる もし相手が銃を向けてくるようなことがあったら」

「右腕を目掛けて発砲」

レイが訓練で教えられたとおりのことを言った。硫平は頷く。

「じゃ、頼んだぞ」

少し青ざめた顔を伝う汗を拭い、硫平はその場所から立ち上がった。

「ARMADAの『BGS』チームU-20所属、識別番号オーエイトの硫平」鈴摩だ」

良く通る声でそう言い、男たちに一步近付く。銀色の制服を着た彼らは、少し怯むような仕草を見せた。

「このビルは今ARMADAの管轄になっている。許可なく立ち入る行為は四大企業間相互条約の第七十四項に違反しているが？」

「……………」

澱みなく言い放たれ、圧倒されたかのように沈黙を守る。

「責任者は」

「右へ！」

レイの声がかぶさり、硫平は咄嗟に右に飛んだ。

ガウン！！ 男の一人が銃を構え、発砲する。弾は硫平の左腕を掠めた。

「くっ……！」

服地が裂けて血が滲む。硫平が体制を立て直し銃をホルスターから抜こうとした、そのとき。

ガンガンガンガン！！ 呆れるほどの速さでレイは狙点を定め、引き金を引いていた。

「がっ」

「つつ！」

口々に悲鳴を上げて倒れ伏す男たち。一人は弾が逸れたらしく照準をレイに合わせたが、引き金を引くより早く硫平の銃に肩を打ち抜かれた。

「さて、と」

苦悶する彼らの手からそれぞれ銃を弾き飛ばし、硫平は手持ちの拘束具で彼らの腕を背中へ捻り金具で止める。失血のひどいものは軽く止血をした。

「サンキュ。助かったぜ」

「いえ」

レイはほっとしたように表情を緩めたが、硫平の怪我を見て眉を顰めた。

「応急処置をしましょうか」

「大丈夫。弾は体内に入ってないし。邑慆さんに連絡して、こいつらの引き取り手を来させてもらって、それからでもいい」

といいつつ白い布を取り出し、止血点に当ててぎゅっと縛った。片手でやっているとは思えないほど手際がいい。レイの感心をよそに、いや彼女以上に、内心硫平は驚嘆していた。実戦は初めてののは

ずのレイがあれば的確な判断、そして射撃をした。信じられない。邑悖が信頼を寄せるのも当然だろうという気がする。通信機器を操作する彼を心配げに見つめるレイ。その瞳がどこか底知れぬ色を湛えているような気がして……。大した失血でもないのに、くらりと眩暈がした。

2

「ふうん……」

隣りのビルから彼らの様子を見守っていたカイルは、双眼鏡を目元から外して嘆声をあげた。

「さすがだねえ。まだ君のじゃ歯が立たないみたいじゃないか」隣りに佇んでいた男は小さく舌打ちをした。

「何の実験だ、カイル。貴重な『BGS』を五人も失ったぞ」

「まあまあ、そう目くじら立てない」

カイルの碧眼が悪戯っぽく光った。

「滅多に見られるものじゃないよ、『BGS』同士の狙撃戦なんて……何を企んでいる」

カイルより少し背が高く、髪は栗色。眼は緑がかった青だった。アレックス・テラ・ムード。邑悖より七つほど年上だが、それでも十分若すぎるDOOMの重役である。カイルとは従兄弟同士にあたった。

「ここにARMADAの『BGS』たちが来ることを見越して罠を張った。しかし返り討ちにされただけだった」

アレックスの眼光が鋭くなる。

「考えてみたら当たり前のことだな。DOOMではまだ『BGS』の訓練法も確立されていないのだから」

「そうかな」

「この間の『BGS』反企業組織によるクーデター未遂にもお前が

絡んでいたと聞いているぞ」

「情報魔だな、アレクは」

カイルの肩を掴んで自分の正面を向けさせ、アレックスは低く尋ねた。

「お前、何が目的だ？」

「……………」

カイルは暫く黙ってアレックスの瞳を見つめていたが、やがて軽く肩をすくめた。

「僕は興味があるんだ」

「興味…………？」

「『BGS』という存在が持つ可能性を知りたい」

「しかし、教会の長老たちは」

「ああ。拒絶するだろうね」

「それだけじゃない。破門されるかもしれんぞ」

「そうかな？ でも」

カイルは目を細めて窓の外を見遣った。

「DOOMが『BGS』を集めて訓練することには何も言わなかったじゃないか？」

「それは表向き、教会とDOOMは関係がないことになっているからな。口出しすることはできないさ」

「君はあの老人どもを押さえ込んでいるからね」

カイルはくすくすと笑った。

「とにかく」

彼の白い袖がふわりと翻る。

「僕は力が欲しい」

「…………え？」

アレックスは聞き返した。カイルは視線を彼と合わせない。

「この下らない世界を変える、力がね」

「…………変えるって、どんな風に」

「そうだねえ、たとえば」

カイルはばつと聖服の前を開いてみせた。白い胸元にくつきりと残る赤黒い火傷の痕。それは十字の形をしていて、掌くらいの大きさがあつた。

「こな」

指先でそつとその痕をなぞりながら、

「馬鹿げたことが起こらないような」

「……カイル」

「人を殺せないからというだけの理由で、全てを神から許されたと思ひ込んでゐる奴らがはびこっていないような」

カイルはにつこりと微笑んだ。

「そんな世界にしたいね」

3

ARMADAの本部内に付設されている「BGS」専用の病院で、硫平は左腕の傷の縫合を受けた。念のため入院することになって、個室に寝かされたが、目は冴えきつて眠れない。どうしてDOOMの「BGS」があそこにいて、しかも自分を攻撃してきたのか、良く分からなかった。

「そついえば……」

ぼつり、と呟く。

「俺たち最近、『BGS』ばかりと戦つてゐるよな……」

当たり前と言えば当たり前かもしれない。一般人が銃火器を扱うことはないし、そもそも禁じられている。企業の庇護のもとにある「BGS」だけが特例として許されているのだ。「BGS」の非合法組織も入手していたようだったが。

「……結局」

俺たちは人間兵器なのかな。そう思ふことは悲しくて、少し鼻の奥がつんとする。

「はあ……」

ため息をついていると、病室の扉がノックされた。

「はい」

「僕だ。邑慆だよ」

「あ、どうぞ」

慌てて身を起こすのと同時に扉が開いた。

「怪我の調子はどうだい？」

珍しく白衣を羽織った邑慆は、ゆっくりと硫平の側に歩み寄った。

「痛む？」

「いいえ」

「そうか」

「今日はラボの方にいらしていたんですか？」

邑慆の白衣を見ながらそう言っていると、彼は軽く頷いて見せた。

「ああ。久しぶりにね」

「邑慆さんって確か……」

「元々は遺伝子医工学の研究者だったからね。一貴……所長と同じ」
「……………」

なのにどうして今は研究から離れているのだろう。不思議に思ったが、口には出さなかった。代わりに言ったのは別のことである。

「それにしても、DOOMの『BGS』がなんであんなところに」

「さあ、どういふことだろうな」

邑慆は肩をすくめる。

「問い合わせてはいるんだがね。そんな事実はない、の一点張りさ」
「すみません……俺が映像を保管出来なかったから」

そのための機器は持ち合わせていたのに、と肩を落とす彼に、邑慆は優しく言った。

「そんなことは気にしなくてもいい。画像があつたところで、きっと彼らは否定するよ。合成だとか、何とでも言いようはあるからね」
それよりも、と邑慆は笑みを浮かべた。

「実戦経験のないレイ」白瀧の存在があつたにも拘らず、君は十分の事をしてくれた。彼女には怪我はなかったしね。本当に良くやつてくれたと思うよ」

「……………」

硫平の浮かない顔を見て邑慥はわずかに眉を寄せた。

「どうかしたのかい？」

「……のは俺の方です」

「何だつて？」

邑慥は聞き返す。硫平はぎゅっと拳を握り、今度ははつきりと言つた。

「助けられたのは……俺です」

「……………」

俯いた硫平を眼下に見下ろしながら、邑慥はす、と目を細める。

「……レイが？」

小さく呟かれたその言葉は、硫平には届かなかった。

第十章

1

「BGS」たちの住まう寮。その食堂で、レイはようやく椿と顔を合わせることが出来た。任務終了後に予想外のアクシデントに見舞われた彼女は、負傷した硫平の代わりに報告書を作らなければならず、今までその作業に追われていた。無論、邑慥には直接事件の詳細を話してあるが、やはり事務的な手続きを省くわけにはいかない。

食堂には既に食事を終えた寮生が多く見られた。その中、椿は彼女を待っていてくれたらしい。顔を紅潮させ、椿はレイに駆け寄る。「無事だった?!」

「ええ」

レイは僅かに微笑む。

「ごめんなさい、心配を掛けて」

「そんなこといいけど。一緒にいたもう一人は負傷したんでしょう?」

「ええ。軽い怪我だけど……」

レイは顔を曇らせる。

「私が足手まといになってしまったんじゃないかしら」

「そんなこと」

椿は微笑んで見せた。

「レイは強いよ。実戦には慣れてないかもしれないけど、判断力も冷静さも、誰にもひけをとらないと思うわ」

「……ありがとう」

そう言ってからレイははっと思い出した。

「椿、そういえば今日から実戦部隊に配属になるって」

「あ……うん」

「おめでとう。……ごめんね、早く戻って来れなくて」

一緒にお祝いであげたかったのに……と視線を落とすレイに、椿は首を左右に振って見せた。

「そんなことどうだっていいのよ。……それに」

椿は食事を口に運んでいた手を止め、視線を宙に彷徨わせた。

「何だか最近良く分からないの」

「何が……？」

「どうして私たち、『BGS』同士で戦っているのかしら」

「……………」

「一般人たちは私たちが嫌っているのに、人を傷付けるときだけ利用している。そう思わない？」

「ARMADAもそうなの……？」

ぼつりと言ったレイの言葉を、椿は驚いたように否定した。

「ARMADAは違うわよ。そうでしょう？」

「……そうね」

レイは頷いた。あの邑慥さんが、そんなこと。

「私たちって結局一般人には武器と同じように見られているんだな、って思うの」

ARMADAでは「BGS」の「殺傷能力」に研究の重きが置かれていない。彼らの高い知的能力を如何にして最大限生かすか、そのためにはどのような教育を行えばいいのか、そういったことにむしる主眼が置かれている。

ARMADAで「BGS」に用意されている地位は何も実戦部隊だけではなく、実戦に不向きと判断された者などは事務方で働いており、それはそれでARMADAの規模拡大に貢献していた。「BGS」のそういった総合的な能力の高さに気付いたことこそ、邑慥の社の功績とっていいだろう。

「だけど、他の企業は違う」

椿はそう言った。

「『BGS』が人を殺せるってところだけに注目しているんだと思

う」

「……………」

「多分、他の企業の『BGS』だって気付いてるんじゃないかしら」
「……………」

レイは静かに呟く。

「その企業から抜ける訳にはいかない……………」のね。普通の社会では生きられないから」

「そう。それにね」

椿は声を低めた。

「ARMADAでは能力の低い『BGS』は受け入れられないって話もあるのよ」

「どうやってそんなのテストするの？」

尋ねたレイは思い当たり、息を呑んだ。

「……………」あの、ここに初めて連れて来られた日の？」

幼かったのではつきりとは覚えていないのだが、何やら様々な試験をされたような気がする。

あれがそうだったのだろうか……………」

「レイの場合は違うけど、私たち『BGS』は新生児診断でそうと判定されれば、即ARMADAの保育施設に移される」

椿は淡々と語った。

「私たちの能力値は、大抵三歳までに予想される範囲を逸脱することはないそうよ」

「じゃあ、もし三歳でARMADAにおける規格外と判定されたら

……………」

「……………」分らない。そもそも本当の話かどうかも分らないんだしね」

「もし本当だとしたら、」

レイは口をつぐんだ。勿論邑慥はそのことを知っているだろう。幼い「BGS」たちがその後どうなるのかも……………」

「多分、そんなひどいことしてないわよ」

椿は明るい口調でそう請け合った。

「……………」

レイは黙って頷く。 そうすることしかできなかった。

2

春樹の元に電話がかかってきたとき、彼はちょうどキラの作った夕食を食べ終えたところだった。発信者のナンバーを見やり、春樹は受話器に手を伸ばす。

「レイか？」

『ああ』

「どうした？ 何かあったのか？」

『今日、「FFA」の元アジトのビルで「BGS」同士の戦闘があったらしい』

「何だつて？」

今までは滅多になかった事態だ。いや、あったとしても市民には伏せられていた。少なくとも春樹にとっては初耳である。レイは今までもこのような情報を手にしていたのだろうか。そんな春樹の心を読んだかのように、レイは言葉を続けた。

『私も知る限りでは初めての事態だな』

「ARMADAと組織の残党が交戦したのか？」

『それなら今までもあっただろう？ そうではなくて』

レイはひとつ小さなため息を挟み、

『企業の「BGS」同士だよ。ARMADAとDOOMらしい』

「DOOMが……？」

『元から敵対関係にある二社だからな。不思議でも何でもない』

「けど……………」

『いや、これは勿論異常事態だ。分かってる』

「……………だろ？」

春樹はつい最近知り合ったばかりの「BGS」を思い出す。

人を殺したことがないわけじゃない。そう言ったときの硫平の表情を、春樹は良く覚えていた。どこか諦めたような、哀しげな……けれど、とても強い笑み。

『今までは一般人と「BGS」がいざこざを起こしても、人命の奪われる危険性は限りなく小さかった』

「……ああ。でも、これからは」
『そうだな』

リイの声も沈痛を極めた。

『「BGS」たちの命が危険にさらされていく……』

「………」
その『BGS』を使う企業のトップは一般人なのに。
「………」

そう思った春樹の胸に一瞬疑念が掠めたが、それは形になる前に消えてしまった。代わりにぽつりと呟く。

「嫌な時代になりそうだな……」

『………』

リイは黙ったまま答えない。多分それは、肯定だった。

3

時計が深夜零時を指した。一貴は紅茶の中に揺れる自分と視線を合わせてため息をつく。

「……どうしたんだい？ 一貴」

眼を上げるとそこには見慣れた微笑がある。当然だ。ここは彼の所有する応接間なのだから。だが、一貴は軽く眉を寄せた。

「お前はいつでも余裕シヤクシヤクという顔してるなあ」

邑慆は表情を改めて一貴を見遣る。

「そうでもないけど？ 今日硫平君を怪我させてしまって責任を

感じているところだ」

「怪我の方はまあ、大したことないで」

先ほど診察してきたが、落ち着いた様子で一貴と会話していた。

あれは強い子や。一貴はそう思う。自分が「BGS」として生まれた運命をしっかりと受け止め、その中で自分のベストを尽くそうとしているように思えた。

気の強い眼差しとその奥にある孤独の影。それはどの「BGS」にも共通しているようだった。そして彼らが邑慥に寄せる深い信頼も……。

「しかし……意外だったな」

邑慥は手元の報告書をぱらぱらとめくった。レイ＝白瀧の手によるものだが、初めてとは思えないほど体裁といい文面といい、よく整っている。だが、邑慥が驚いたのはそのことではなかった。

「初めての、それも急遽起こった実戦で……見事に疏平をサポートしてくれた」

「ようできた子やねんな。お前が目つけてるだけのことはある」

「うん、まあね」

邑慥は苦笑して一貴を見た。

「でも別に目をつけてるってわけじゃないよ」

「言い訳せんでええ」

一貴は苦笑する。

「お前は何かとレイちゃんを気にかけてるやろ」

「そうかい？」

「とぼけんでもええやないか」

一貴は少し眉をつり上げた。おおらかな彼に似合わず、かなり気になっているらしい。まあ、無理もないかもね。邑慥は内心苦笑した。

「なんでレイに拘るねん」

「成績優秀だし」

「それから？ まだなんかあるんやろ？」

「一貴……」

邑慄はやれやれ、と首を振る。

「伊達にお前と長く付き合ってるわけやないからな」

一貴は意地悪く笑った。

「分かったよ」

邑慄は軽く両手を挙げて降参を示した。

「僕はね、彼女自身に興味があるんだ」

「レイちゃん自身に……か？」

「だけど、いくら君にでもこれ以上は言えないな」

邑慄は肩をすくめた。

一貴はため息をついた。この男をこれ以上絞り上げてても何も吐かない。伊達にこの男と長く付き合っているわけではないのだ。

「ま、ええわ。そろそろ俺も休ませてもらうで」

「じゃ、お休み。明日の朝の会議には遅れないようにね」

「分かってる」

一貴はお茶を一息で飲み干し、邑慄のオフィスから出ていった。

4

オフィスに一人残った邑慄は八時間ほど前を思い出す。夕陽がブラインド越しに真っ赤な輝きを見せていた。

報告を終えて戻ろうとしたレイが、ふと扉の前で振り返る。躊躇いがちに彼女は唇を開いた。

「邑慄さんは……『BGS』のこと、どう思っているんですか？」

「どう……って？」

邑慄は瞬きを繰り返す。

「私たちはここでしか ARMA DAでしか生きていきませんよね……それってやっぱり一般人とは違うから……ですか？」

「レイは外に出たいのかい？」

「……………」

レイは沈黙した。

「今の社会じゃ共生は無理だ。それはわかるだろう？　だつたらどんな社会にしたい？　いや　そんな大袈裟な事じゃなくて……………」

邑悻はレイの瞳を見据えて尋ねた。

「君はどうしたいんだい？」

「……………」

長い静寂があつた。邑悻は黙つてレイを待つ。　これはいずれ聞いておく必要があつた事だ……。期待とも不安ともつかない、好奇のような安っぽいものとも違う感情。

やがて、レイの唇が開いた。

「分かりません……………」

「分からない……………って？」

聞き返す邑悻に、レイは困つたような笑みを浮かべた。

「別に　私は何も変えたいなんて思っていないんです」

「え？」

意外な答えに聞き返すだけの邑悻に、レイは斜め上に視線を彷徨わせながら言つた。

「友達の中には、結構現状に不満があつたり、一般人と同じように外で暮らしたいって言つてたりする人もいますけど……………私には特にそういうのはなくて」

「うん」

小さく頷いて話を促す。

「私は別にこのままで全然構わない……………知らない人に何か言われたつて、慣れちゃつてもうそんなに気にならないし……………我慢できます」
邑悻を見据えた瞳が夕闇を宿して色を深めた。

「これからずっとここに居られたら、それでいいやなんて……………そんな消極的な事しか考えていないんです。担任の先生も、邑悻さんも……………所長も……………皆優しいから。どうせ私に両親はいないから、ここから出たつて行くところありませんし……………」

そう言って笑う顔が何故か泣き笑いのように映った。

「駄目ですか？」

「全然駄目なんかじゃないよ」

邑悛は優しく微笑んだ。

「それでいいじゃないか」

彼女の肩にそつと手を置く。

「君が自分の意志でここにいたいと思ってくれるのはとても嬉しいことだ」

そう言つと、レイの肩から力が抜けるのが分かった。

「けど、だったらどうしてさっきあんなこと言つたんだい？　ここ
でしか生きていけないとか……一般人とは違ふとか」

「ああ……」

レイは苦笑を浮かべた。

「私はここ以外に行くところなんてないですけど、家族がどこかに
いるって分かつてる人は、やっぱり結構会いたいと思ってるみたい
で……」 だったら会わせてあげられたらいいのと思ったんです」

「別にARMADAでは会いに行くことを禁止してはいないんだよ
？　まだ要請が出た例はないけれどね。ただ……」

邑悛は眉を顰め声を落とした。

「現実には、家族の方が嫌がる人が多いんだ」

「……………」

レイは辛そうに眉を寄せて視線を落とした。

「そういうのはやっぱり……変わって欲しいですね」

「何に？」

「え？」

聞き返されたことが意外だというように、レイは顔を上げた。

「何に変わって欲しいんだい？　レイは」

「何につて……」

「ARMADAの施策を変えて欲しいのかな？　それとも自分達『
BGS』自身が変わらなくちゃいけないと思う？　それとも」

邑悖の目の奥が微妙に闇を宿した。

「『BGS』以外の一般人かな？」

「……………」

邑悖さんは一体何を言おうとしているのだろうか……？ レイが戸惑いながらも口を開こうとしたとき、オフィスのドアが開いた。「チーフ。会議の準備をお願いします」

入ってきた秘書の言葉に、慌ててレイは立ち上がった。

「レイ」

そう言っただけで彼女を見つめる邑悖の目から、既に闇は消えている。

「考えておくといいよ。一体自分が何を守りたいのか 何を変えたいのか」

邑悖は微笑んだ。

「それはきつと君を強くしてくれる。そして これから先、君を支えてくれるはずだ」

レイはこくりと頷き、オフィスを出て行った。

「……………」

邑悖はその後ろ姿を見送ると、天井に視線を投げてふ……とため息を吐いた。資料を取るために秘書が再びオフィスを出たのを確認して、呟く。

「レイにはないんだな……………」

邑悖が内に抱えているような。

「…………憎悪が」

薄く眇められた彼の眼には、彼の一番忌まわしい記憶が蘇っていた。

邑悖は窓際に歩み寄り、暗い夜空にその底知れぬ笑みを映す。

「レイはARMADAにとってではなく……僕にとっての切り札なんだよ。一貴」

小さく笑みを含んだ唇で呟いた言葉は、夜の闇に吸い込まれて消

え
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8132z/>

SIXTH

2011年12月25日22時50分発行